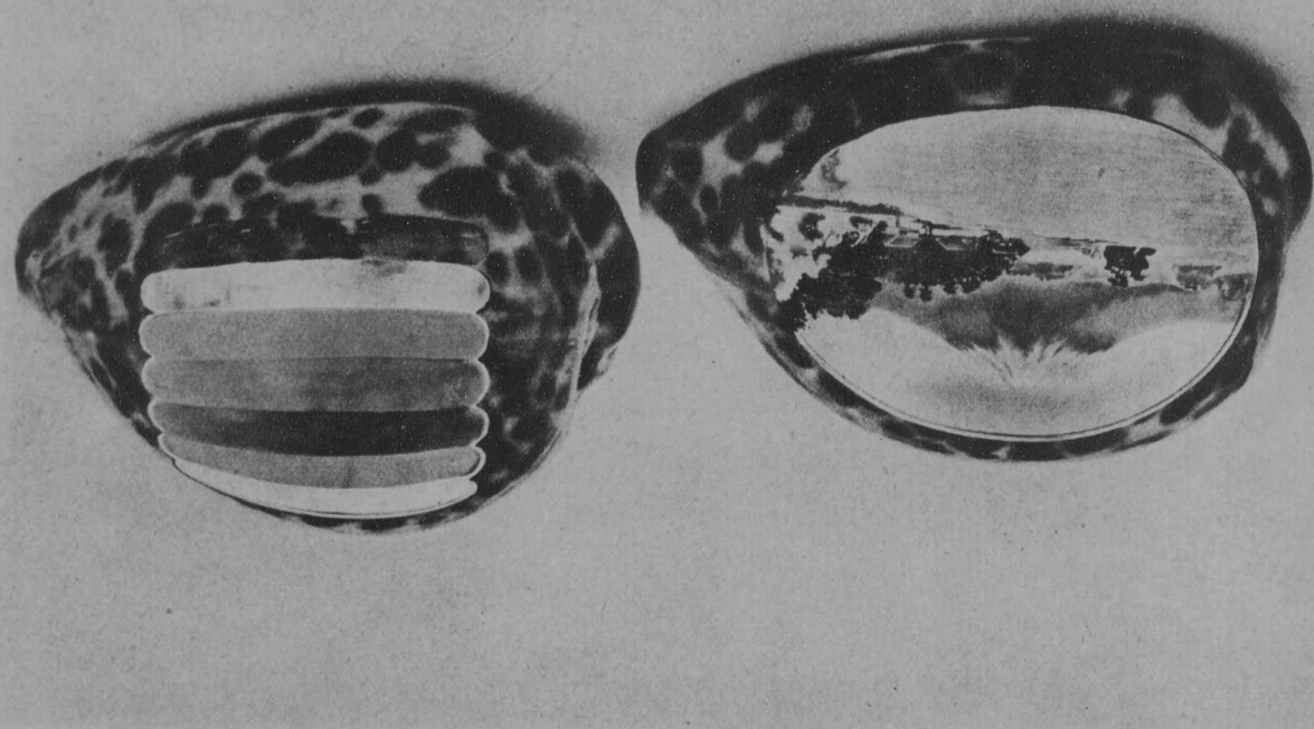
である。

星寶、通稱子安貝と云ふ最も色層多く、七乃至八層を有し表皮層、茶褐色、白茶色、白鼠色、鼠色、濃紫色又は茶紫色、薄紫色、最下層は白色である、(圖版右)星寶は最も色層多き故、利用の範圍も廣く、文鎭(圖版左)圖は靜浦の富士である、近き丘は皮表層二、三層を用ひ、海は四、五層、遠見の島、富士は六、七層、空は白色のである。裝身具としては簪に各色層を利用したる菊花の重なつたもの、帶締に白色地に四、五層の牡丹花、濃紫色の葉を現はしたるもの等面白く、其の他ピン、カフス釦等を作る。(圖版第二十九版)

唐冠り、又千歳貝は中層の乳白色、下層の帶黃茶褐色を利用して人物、風景の置物、簪、帶締、カフス釦、ピン等に細工せらるゝこと、星寶と同じである。

萬寶貝は表皮斑紋ある海老茶色、帶黃色、乳白色及び下層は美しき瑪瑙色を有し、最も美麗なる貝であつて、置物其他の利用は千歳貝と同樣である。



伊太利式彫刻

鎧文　土富ノ浦産　　厚色ノ貝

夜光貝は表皮の綠色、中層の白色、下層の眞珠層を利用したる大花瓶、裝身具は簪、カフス釦、帶締には綠色を笹の葉とし、白色を積れる雪と見たる所謂雪持笹は面白きものである。

寶貝又黃色寶、めんがたたからと稱し、表皮の黃色、中層は、白下層の濃紫色を利用したるモノグラム卽ち英頭字の組合せ文字のピン、カフス釦最も面白く、時計飾り等を作る。

黑蝶貝は內面の銀色(眞珠層)と表皮に近き黑色を利用して簪、帶締、ピン、カフス釦、灰皿等を作る、銀色の豆に黑色を配したる、或は逆に銀色の地に黑色のライオンを現はしたる、ピン、時計飾りも面白い、此貝は層數少いが利用の方面は廣い。

右の外八丈寶の文鎭、簪、ピン、カフス釦、帶締。—海兎の文鎭、モノグラムピン、簪、帶締、—法螺貝の簪、帶締、—赤螺の置物、簪、ピン—鮑貝の外皮層を利用したる簪、ピン、帶締、カフス釦等を作る事が有るが省略する。

以上の原料は皆我琉球にて得られる貝のみであるが、西印度に産する、カメオセルと云ふ千歳貝に似て下層黒色の貝がある。又ピンクセルと云ふ上層に薄桃色を帶びたる貝もあつて、伊太利の方では多く此貝を使用して居る。

最後に伊太利と我國との彫刻法及び圖案の相違點を記して此の稿を擱筆する事とする。

伊太利は大理石彫刻法と同じく、刀を掌に當て彫刻する突き彫と云ふ方法に據るが、日本のは古代木彫より進化したる横なぐり彫りである、又圖案も伊太利の方は主として人物を好み、日本にては草花を愛す、實際日本にて模せる人物像は全く不似合である。前者は粗なる彫刻の裡に雅味を有し、後者は精緻なる裡に優美なる特質を有する等、彼我の國民性が自ら彫刻の上にも現はるゝ事は甚だ面白き對照であらねばならぬ。

一般貝細工は未だ舊套を脱し得ない程度であるが、近來漸次改良され或種のものは進歩著しきものもある、就中電氣モーターの動力を利用し生産能率の增加したる事と貝類利用の範圍が廣くなり、意匠の追々高尚に向ひつゝあるは喜ばしきことである。

貝釦　貝釦は近年内外共需要激增の爲め、製産年額壹千萬圓に垂んとして居る。十餘年前の貳參百萬圓に比すれば實に隔世の感がある。原料の大部分は外國産を用ひ、主として南洋より輸入されるのである、主なる貝は高瀨貝(サラサバテイ)廣瀨貝、(ギンタカハマ)及蝶貝(白、黑蝶貝)等である、内地産のものは榮螺、玉貝(テウセンサヾエ)鮑、南光貝(ヒラサヾエ)及支那ドブ(近年支那より輸入する淡水産貝の總稱)黑蝶貝、眞珠貝等が需要多い。

貝釦のサイズはライン(四十ラインが一吋)を以て直徑の標準とし、十ライン(我二分二厘)より六十ライン迄が最も需要多き寸法であつて、所定の直徑を有する錐

鋸(錐先と云ふ)を回轉せしめ貝殻を繰抜くのであるが、卷貝の方は足踏機械を用ひ、二枚貝の方は平物と稱し手繰機械(カントーセンと云ふ)を使用するのである、其製作工程は大略左の通である。

一、穿孔　くりかたと云ふ、所要のサイズを繰抜く。
二、研磨　右の工程を終りたるものは兩面を平滑とす。
三、彫刻　模様附けと云ふ、各種の型による輪郭を彫刻する。
四、鑽孔　あなあけと云ふ、二孔、四孔の穴を回轉錐にて明ける。
五、擦　がしやと云ふ、樽に房州砂と木屑を混じ水分を含ましめ、貝釦を沒入し徐々に樽を回轉せしめ角を圓滑となす。
六、漂白　藥液を一定の温度を保たしめ、之れに貝釦を浸し、一定の時間内に漂白を終る。
註　平物は漂白せず。
七、擇　仕揚りたる貝釦を撰分け等級を附ける。
八、カード附　上等品及サイズの大小により、一打、二打、三打、六打、一グロスを紙に綴る。
九、包裝　二打附は一グロス紙包
三打附は五グロス紙包又は紙箱入

六打附は十二枚　同上
一グロス附　同上

貝釦の種類　穴物(二ツ穴、四ツ穴、裏穴)　鑲附きの二種で、染色したる釦及び彫刻を施したる釦等の特殊のものもある。

貝釦の品質　高級品は白蝶貝釦である、婦人及夏服用である、次て黑蝶貝釦は主として洋服用である。最も需要廣きは高瀨貝釦であつて貝釦の大部分を占めて居る。廣瀨貝、南光貝、支那ドブ貝等は高瀨貝の代用として需要がある。榮螺、鮑、眞珠貝釦は安物の釦として需要多い方である。

切貝と摺貝　切貝とは鮑貝の水管口より切斷して周縁の部を分離したものである浪(殼内面にあるうねり)尠く平滑なるものを最良とし、戰前專ら獨逸國へ輸出されたものである。要するに歐羅巴沿岸には鮑貝(トコブシ大のものはある)を產せず、歐洲人は特に日本鮑の色彩單純なるを賞翫するので、此切貝の輸出を見るのである。尤も獨逸國に輸入し美術品に嵌入加工するのである。

摺貝は切貝より長三角形(周縁の生長線と並行して)の一片を切離し、左の工程により紙狀の薄片となすのである。

一、服摺り　眞珠光澤ある方を、隆起砥石に掛けて摺り下ろす。

二、甲摺り　背部の方を更に摺り下ろす、斯樣に一と二の工程を繰返す時は貝殼の灣曲は薄くなるに連れて平直となる。

三、薄め　更に中砥石に掛けて兩面を平滑となす。

四、仕揚げ　密なる砥石で一層薄く最後の仕揚げを爲す。

以上の如くして得たる摺貝は大さの寸法により左の如く區分する。

大々版　長さ四寸三分以上のもの

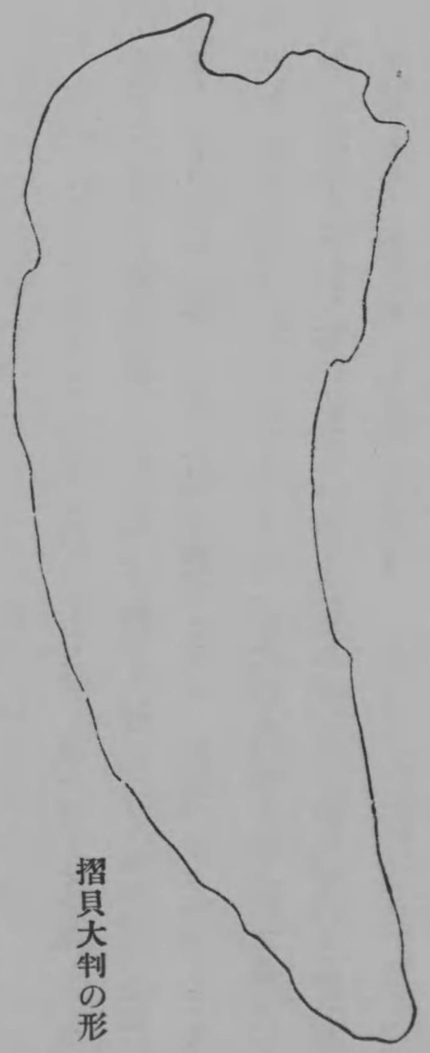
大　版　長さ三寸八分以上四寸二分迄

中　版　長さ三寸二分以上三寸七分迄

小　版　長さ二寸七分より三寸一分迄

此大版摺は鮑貝一個に付き一枚しか取れぬ。殘餘の箇所よりは小形のもの二三を取り得るのである、前者を薄貝と云ひ百枚を以て價の標準とし、後者は中摺と云ひ

百枚の厚さを則定したるもの百斤に對し價を附するのである、通例需要多き寸法は三分三厘(卽ち十ミリ)八分三厘、一寸、一寸二三分、一寸七分、二寸、三寸三分等である。仕向地は獨、英、佛、伊等である。



摺貝大判の形

摺貝には鮑貝の外夜光貝で作るが主として內地向である、主として婦人の裝身具、櫛、笄等に嵌入する所謂割貝に使用する、又鮑(アメリカ鮑も)夜光貝、白黑蝶貝、

マベ（通稱烏帽子貝）、池蝶貝等の厚摺のものは研出し嵌入用として卓、文臺、硯箱、香合、盆等に使用する。

貝粉　鮑及び夜光貝を藥液又は高熱を與へて石灰質と眞珠層とを分離し、眞珠層は能く破碎して薄片の粉末と爲し、篩を通して數種に篩ひ分けて篩の番號を附ける、縱令ば三十五番、六十五番、百番、百二十番等と呼ぶ、番號の多き程細末である。殆んど摺貝の薄摺を粉末にした樣なものであつて之れを貝粉と云ふのである。漆器の梨子地、裝身具、人造石等に塗込み、厚く荒粉に碎いたものは研出し嵌入用、縱令ば刀の鞘、旗竿、傘の柄、馬具等に使用する。

胡粉　は牡蠣の貝殼を數年間雨露に曝し置き、多くは山間の水車を利用して能く碎き粉末と爲し、水槽に投じて攪拌して數々水を取り替へ、然る後約一ヶ月間能く

沈澱せしめたるものを乾板（ほしいた）と稱する板上に盛り、數日間炎天に乾燥せしめ碎きたるものを面（めん）と云ひ、更に挽臼に掛けて細末として仕揚げたるを粉と云ひ區別して居る。

原料にはイハガキ（クツガキ、ボタンガキとも云ひ、淡路、伊豫、日本海等にて産する重厚の牡蠣）を用ひて最良品なる繪の具、人形等の高級塗料を得。板甫蠣（播磨、淡路等）の蓋の方よりは良品なる繪の具、人形、扇子、襖紙、菓子の糖衣等を得、身の方は品位劣るから工業用として玩具、漆器の下塗用のものを得。廣島牡蠣はペンキ代用の劣等品を得るに留まる。

胡粉の製造は原料の撰擇も必要であるが、製造に使用する水質が絶對製品に影響を與へるのと、原料の需要、工費の關係上製造者は甚だ尠く、京都白川、宇治、及び河内生駒の溪間には水車を利用し、昔から好適の製造地となつて居る。

貝灰　鮑、貽貝（瀨戸貝）灰貝（チンミ）及蜆等の貝殼を燒きて灰となしたるもので

上等品は人形、扇子等の塗料に、中等品は染料のアク抜きに、下等品は石灰の代用、肥料等に用ふる。

燒竈は圓筒狀、土製の立竈を築き、鐵格子(ロストル)上に木炭を竝べ其上に貝殼を詰め、更に木炭と貝殼とを交互に竝べ、鐵格子下よりを火を點じて蒸燒となす事二三日間にて貝灰を得る、上層は上等品で以下順次に品質劣る。又劣等の貝殼を混じ、燃料にコークス、無煙炭等を使用する時は劣等品となる。貝灰には一種の特質を有し、使用途によりては珍重せられて居る。

眞珠 康熙字典に曰「石美者玉」「珠蚌之蔭精」蚌蜃之屬、生三江漢渠瀆之間」殼堪レ爲レ粉云々、蚌は支那楊子江の沿岸の湖沼に産する、カラスガヒ屬である。要するに人工を加へたる寶石には玉字を用ひ、天然に生じたるものには珠字を用ふべきものであつて、眞珠とは主として、貝類の肉中に生ずる珠と云ふ義に外ならぬのである。

歷史上の眞珠。三千年の昔佛敎の經文中に眞珠を七寶の一に數へ、清淨無垢なる事是に比ぶべきものなしとし、財貨以上に貴びたり、且つ幾分か崇拜的意思をも含まれて居るのではあるまいか。西洋の譬諭古諺等にも多く引用せられて居る。

妙法蓮華經授記品第六

以二金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、眞球、玫瑰七寶一合成云々。

眞球は處女の如く數多の注意を要す。

ピーコンスフイールド

箴言第三章第十五節に曰く、

智慧は眞球よりも貴し、汝の總ての財寶も之と比ぶるに足らず。

同第二十章第十五節に曰く

金もあり、眞球も多くあれど、貴き器は知識のくちびるなり。
目は顏の眞球なり。

英國俚諺

希臘羅馬の全盛時代、即ち金剛石の發見以前に在りては、眞珠は唯一の裝飾品で有つた、頸飾、耳飾は勿論華美なる衣服に眞珠寶石を裝綴し、甚だしきは其脚部に至る迄、眞珠を縷め、所謂眞珠美を誇り競ふたのである。

彼の有名なるクレオパトラ女王が、アントニーを饗應せるとき、彼の誇とせる耳飾の最良眞珠の一個を取り外し、酒盞の醋中に溶解せしめ、アントニーに飲ましめたと云ふ。此一盞の酒は、實に數十萬金の價なりしと傳へられて居るが、恐らく誇大の形容ならんが兎に角當時女王の驕奢其極に達して居たことが想像される。

或時には眞球を獲んが爲めに、數々戰爭を起した事も有つた。數々法令を以て眞珠の裝飾を嚴禁せしめ樣としたが、少しも効果が無かつた事もあつた。流行思潮の恐ろしき勢力であつたことに驚かされる。

我國にては上古、之良多麻、之躍佗眞、眞珠など云ひ、眞珠を貴重した事は明かである、古事記豐玉姫の獻歌に

阿加佗麻波、袁佐閇比迦禮杼、斯良多麻能、岐美何余曾比斯、
多布斗久阿理祁理。

火遠理命の美を眞珠に比し譬へられたものである。此外萬葉集などに多く詠歌されて居る。

古美術上の眞珠。歐洲帝王の王冠に眞珠寶玉を鏤嵌したるものは多いが、我國にては眞珠を古美術に利用せるものは尠い、唯僅に奈良東大寺の三月堂に安置せる不空絹索觀音像(天平、勝寶年間作乾漆)の寶冠及び白毫(佛の眉間に光明を放つ、左旋の毛に象り、金剛石、水晶、玻璃等を嵌入す)に眞珠を裝嵌しあると、正倉院御物中、聖武帝御禮履の側面に、眞珠と寶玉とを嵌入しある外、朝鮮國寶中に、婚儀に使用せる緋色織物地に、花葉を刺繡し、二百數十個の眞珠を添綴せるもの、竝に金屬製

團扇に眞珠と寶玉二百數十個を添綴せるものがある。眞珠は淡水眞珠と思はる。昔朝鮮より豐太閤に贈られたと稱するものと同一であると云ふ事である。

眞珠の成因。 眞珠の成因に就ては、上古より種々の迷信傳說がある。電光に依て眞珠が生ずると云ひ、或は露滴貝中に入り凝固して眞珠と成るものと信じて居たのである、或は砂粒が貝中に浸入して肉に刺戟を與へて眞珠を形成すると云ふ說は一般に信ぜられて居るが、近來研究の結果寄生虫の作用に起因すると云ふ說は、最も有力と爲つて來た。寄生虫說にも二說有つて、一は寄生虫が外套膜に入て刺戟を與へ、眞珠液の分泌を促し、寄生虫は核と成つて眞珠層にて包被せらるゝと云ふ說。一は刺戟を與へ分泌力を集中せしむる故に、玆に石灰質の核を形成し、更に眞珠液にて包被して眞珠と成ると云ふ說である。眞珠を切斷して顯微鏡下に檢するに、中心には無機物の圓核を有して居るのに徵して、今や寄生虫後說は動かすべからざる事實となつて居る。

更に進んで眞珠形成の原理を概說して見たいと思ふ、先づ貝殼構成の順序を簡單に述べよう、貝殼は外層、稜柱層、及び眞珠層の三層から成立つて居る、外層とは貝殼を保護する表面の外皮層で、膠質のものが多い、貝下には歪形の稜柱を爲した厚き層がある、其層面は恰も蜂の巢の樣な形で有つて石灰質である、其下部卽ち外套膜に接して居る內面には、緻密なる眞珠層が有る、外套膜は內臟を保護する外、不可思議の機能を持つて居る、或期間は外皮層のみを分泌し、次で稜柱層を分泌し更に眞珠層を分泌す、此の如く絕えず繰返して貝殼の發育を司る、此層は分泌液の薄板狀に凝固したるものが層々相重りて厚さを增して居るので有るから、貝殼を切斷して顯微鏡下に檢せば、薄層を明瞭に認むる事が出來る。

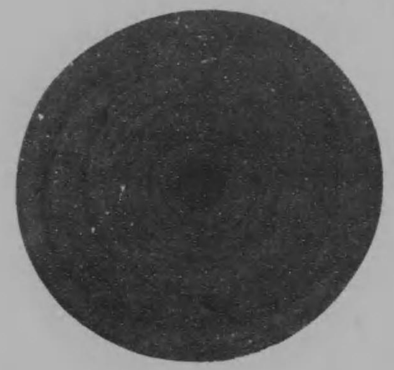
眞珠層は鮑貝の如く燦爛たる光彩を放つものと、蛤貝の如き乳白色の光澤なきものと有る。素と眞珠光澤あるものから出た名稱で有るが、又眞珠原質の層と云ふ意味になるので有る。

貝類の動物體、卽ち肉に或作用を受け眞珠を形成し始むる時、眞珠囊（パールサック）と稱する薄膜にて保留せられ、眞珠は此囊中にて完成せらるゝものである、此囊が往々破れて眞珠が脫出する事が有る。其時眞珠は貝殼の上に固定せられ貝附眞珠と成る。又外物の外套膜に浸入せる場合及び貝殼に穿孔するイシマテ、カモメガヒの一種が貝殼を貫通し來る時、貝附眞珠と同じ形式のものを作る事が有る、是れは眞珠と云はず貝殼の瘤と云ふのである。

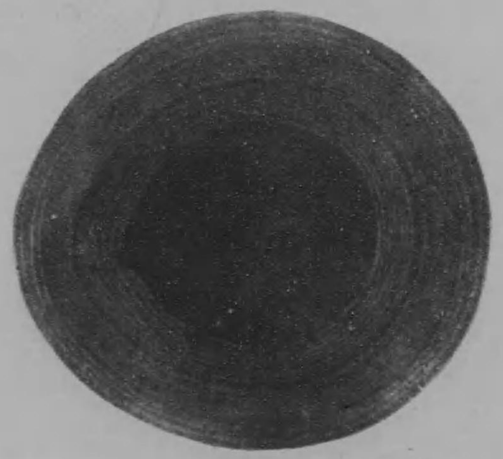
前述の如く天然眞珠は、盡く外套膜の眞珠囊（パールサック）中に形成せらるゝ故に袋眞珠と云ひ他の眞珠と區別して居る。

つまり眞珠は、外套膜より分泌する眞珠層の球狀に凝固したもので有るから、貝殼の內面（眞珠層）と同色のものを生ずる、卽ち鮑貝よりは光澤ある靑綠紅色を交へたる眞珠を、蛤貝よりは白色の眞珠を生ずる事となるのである。

眞珠の種類と產地。眞珠は雙殼類（瓣鰓類）の大部分に生じ、往々單殼類（腹足類）



あこやがひ天然眞珠斷面（十四倍大）



眞圓養殖眞珠斷面（二十一倍大 鉛核のもの）

に生ずることがある。印度セイロン島のマナー灣、斯波灣のバーレイン島附近、紅海のヂッダ等は上古より有名な眞珠の産地である。支那楊子江の沿岸に在る湖沼には、淡水眞珠を饒産し、日本肥前の大村灣、能登七尾灣の穴水等亦有名の産地である。濠洲の木曜島附近には、蝶貝眞珠を産し、北米ミスシッピー河には淡水眞珠を産する。

□あこやがひ眞珠　あこやがひ又眞珠貝と云ふ、優秀なる眞珠を生ずるからである。學名を Pinctada martensi Dkr. と云ひ本邦中部以南の暖海に産す。肥前大村灣、土佐宿毛、高岡。淡路福良。伊勢五箇所灣。志摩英虞(あご)灣、的矢灣。能登七尾灣等は主なる産地である。

貝は十二尋以内の地盤傾斜緩、海水清淨循環良く、比重一、〇二乃至一、〇二五、多少淡水を混入する所にて、海底には礫石岩礁を混じ、ホンダワラ、アジモ、ミル、オゴノリ等の海藻の生ずる場所に棲息し、六月より九月の間に産卵する、卵は海中

にて受精作用を爲し、一定の期間游泳して後、蝶番部の前方にある窪所より、瀬戸貝と同じ人足絲を出し、右殼を下に倒立し岩礁に附着して居る、多くは貝と貝と相附着して群集して居る、幼貝は略三角形を爲せど發育するに從ひ巾着形となる。滿一ヶ年にて高さ一寸五分、二年にて一寸九分、三年にて二寸四分、四年にて二寸六分、五年にて二寸七分、六年以上は深さと厚味とを增すのみで、十年以上の老貝は漸次老衰して死滅するのである。

著者原圖

貝殼は薄き表皮及稜柱層と眞珠層の三層から成立て居るが、表皮と稜柱層との區別は判然しない、つまり表皮は稜柱層の特化したものに外ならぬと自分は考へる。又肉柱の附着せる部分には、光輝層と稱する一種の透明なる層がある、貝殼の發育するに當り、一箇年毎に肉柱は移動し、眞珠層も輪線を劃するが故に、貝殼に印する肉

柱の痕跡に據り、又は貝殼斷面の輪線區劃數に據り、貝殼の年齡を推知する事が出來る。眞珠の斷面にも此輪線を明瞭に認むる事の出來るものも有つて、眞珠の經過を推定する事を得るので有る、是れは自分の新たに研究したもので有る。

眞珠は外套膜の緣邊に多く優良なるものを分泌す、之れをフクミダマと云ふ。肝臟部及肉柱の邊には小粒の罌粟珠が多い、又耳狀突起部には、往々大形の優秀品を生ずる事が有る。ミヽタマと云ふ。

眞珠の優劣を判定するには形、色、艶の三者を比較せねばならぬ。形は正圓の俗に八方轉と云ふもの、色は純銀色の玲瓏たるものに充分冴わたる艶を持たものでなくてはならぬ。此三條件を標準とするが、色澤は最も重要で有つて、縱令ば正圓形のものでも、多少の色彩が有り、又は艶惡しきものよりは、稍歪形なるも色澤の完備したる方を優良品とするので有る。色彩(金色)の濃厚なる程價卑いので有る。

眞珠に金銀の別を生ずるのは何故かと云ふに、分泌せらるゝ位置竝に分泌の時機

にも關係し、産地により其特質を顯はすものである。外套膜は絶ねず稜柱層と眞珠層とを分泌する事は、既に前述の通りである、故に稜柱層を分泌する時に、眞珠を形成する時は、全部稜柱層より成る眞珠が出來、或は稜柱層と眞珠層と交互したる眞珠が出來る事がある。又貝殼の周緣は常に分泌液の作用により、黄褐色を呈するものなるが故に、此周緣に接して分泌したる眞珠は、金色を呈する理で有る。金色眞珠は概して艶麗はしきものが多い。

眞珠を分泌する數は、一個の貝に一個を分泌するもの最も多く、二個以上十數個を分泌する事は漸次稀である。往々二個若くは數個の眞珠が密着したるものを生ずる事がある、之れを雙子(ふたご)眞珠とふ、雙子眞珠は隣接したる袋眞珠が、輪層を增大するに伴ひ、相密着したもので、往々珍稀なるものを生ずる。四十餘年前濠洲の蝶貝中より發見したる結合眞珠は、九個の眞珠が十字架狀を呈し、サウザンクロスと呼び價十數萬金、有名なるものであつた。

あこやがひ眞珠は本口(ほんくち)と呼ばれ、眞珠の標準となつて居る。砂粒の樣な微塵珠でも一匁五圓以上罌粟粒の良好なるものは一匁百五拾圓は價する。所謂八方轉の模範的なるものは直徑一分七厘のもの一個約百貳拾五圓とし、換算すれば一匁貳千五百圓に當る。直徑二分乃至二分五厘以上のものは價格累加して非常に懸隔を生ずる事金剛石と同樣である。何故かと云ふに眞珠貝は貝殼の大さ三寸を超ゆるもの尠き故に大粒の優秀品を分泌する事は甚だ稀で有る。（圖版第三十圖一）

□あはび眞珠　鮑貝眞珠は阿波寐之羅佗魔、鰒珠など稱し、最も古くより知られたる眞珠で有る。

日本書紀允恭天皇の條に曰く

十四年秋九月天皇淡路島に獵し給ひ、終日遂に一獸を獲ず。神の告によりて赤石海底に眞珠を探らしむ、海人男狹磯(おさし)なるものあり、六十尋之海底に入り大蝮を抱へ來る、則ち其蝮を割きて眞珠を得たり、其大さ桃子の如し、乃島神に祠

る云々（意譯）

和漢三才圖會に曰く

按眞珠以二鮑珠一爲二最上一、然得之者鮮、故今用二蠣蝗、淺蜊二種一而已云々。

鮑眞珠の光澤は麗しいけれども、眞珠層と同一の綠紫色の色彩を持て居るので、あこやがひ眞珠より下品なるを免れぬのである、併し間々大形な逸品を得る事がある。

□蝶貝眞珠　蝶貝は古くより知られ、濠洲の東北トーレス海峽より、ソロモン群島、ニューギニア沿岸より蘭領印度に至る海底に產し、殊に木曜島附近は有名なる產地である。學名を Pinctada maxima Jameson. と云ひ最近命名せられたので、眞珠層の內外純銀色のものと、周緣部黃褐色のものと有る。眞珠貝科中の最大種にして、直徑一尺、厚さ一寸に達するのがある、蝶貝眞珠は概して白味を帶びたるもの多く往々數萬金に價するものを生ずるので有名である。

本種の稍小形にて外面及び周緣部、帶綠暗黑色のものを黑蝶貝と稱し、學名を Pinctada margaritifera Linné. と云ふ、前種と同地方及び我沖繩列島にも產す、鋼鐵色の眞珠を生じ、色變りとして好事家に賞美せらるゝのである。

□貽貝（いがひ）眞珠　貽貝又淡菜、東洋婦人等と稱し、東京附近にては周利、伊勢にてはイノカヒ、京阪にては瀨戶貝と呼ぶ。朝鮮海峽、紀淡海峽、三河、北海道に饒產し、眞珠は、白、鼠、茶褐、黑色のもの多く、何れも劣等品で有るが、漆黑正圓のものは黑眞珠として賞美せられる。

□淡水產眞珠　淡水產カラスガヒ科の貝には大概眞珠を生ずる、北海道及び東北地方の河流に饒產するカハシンジュ（貝の名）學名 Margaritana margaritifera L. には美しき眞珠を生じ、其他カラスガヒ、イケテフガヒ、タガヒ、ドブガヒ、ヌマガヒ、イシガヒ、サヽノハ、マツカサガヒ、マルドブガヒ等皆眞珠を生ずるが劣等品が多い。往々カラスガヒ、イケテフガヒよりは優秀なる逸品を生ずる事が有る。

其他眞珠を分泌する貝は數十種あるが、何れも裝身具に適せぬものゝみであるから、一々解說を略し、種類のみを揭ぐることゝする。

□夜光貝、□槳螺、□琿梨（鑄豆大のがある）□赤貝、□帆立貝、□板屋貝、□かき、□板甫蠣、□ペルナ、□蛤、□淺蜊、□蜆、

人工養殖眞珠 Culture Pearl. 人工を用ひて天然と同じ眞珠を得んとする方法は、古く歐羅巴に於て數々試驗せられたが、好結果を得なかつたらしい。支那では二三百年前、カラスガヒに佛像、鯉の鉛核、又は樹脂の球核を挿入して人工貝附眞珠を完成して居る。佛像は七個乃至十三個、鯉は二個或は四個、球は四十個內外の多數である。其方法は不明であるが、篦の類を以て殼を開き、核を貝殼の內面に附着せしめ、更に池中に放養して約二ヶ年の後取揚ぐる時は、曩の核は眞珠層の薄膜を被り、貝附眞珠と成て居る。是れ人工養殖眞珠の起源である。蝶貝に共棲する一種の小蟹が眞珠層の爲に埋沒して、貝附眞珠（貝の瘤）と成つて居る事が有る。（圖版第三十一版）

□**日本の養殖眞珠** 故箕作博士の立案に基き、御木本眞珠養殖場にてアコヤガヒに貝製の核を挿入する方法に據り、特許を得たのが始めで有る。然るに明治四十年御木本氏は三重縣の養殖業者長束七郎、北村幸一郎、北村重吉の三氏に對し、特許權浸害の訴訟を提起し、第一審は三氏の敗訴に歸し、控訴審にて無罪となり、同院檢事の上告に依り大審院にて審理の結果、大正元年十二月第二審の判決を正當と認められ、玆に數年間の係爭は御木本氏の敗訴に歸し、多年御木本對養殖業者との軋轢も自然解決する樣になつた。そこで養殖業を企圖する者續々增加し、現今三十餘箇所の養殖場を算する有樣で、斯業發達上誠に結構な事で有るが、勢ひ粗製品を市場に供給する事になるから眞珠の品位を墜し、日本養殖眞珠の聲價を毀損する樣に成りはしまいか、當業者の反省を希ふので有る。

□**養殖眞珠の方法と養殖場** 最初核の材料を撰擇するに最も苦心した、象牙、硝子、大理石の一種、蝶貝の核等に就て半圓形、缺圓形、の各種を試驗の結果、蝶貝

の圓球核を採用する事に成つた、扨て又御木本式の養殖眞珠は核を唯貝殼と外套膜との間に挿入するのみであり、幸ひアコヤガヒは殼頂を下にし移動せぬものであるが、核の脱出するもの百分の十乃至二十に達するので、此脱出球を防ぐ爲め、卽ち歩留りを能くする爲め、核を貝殼に固定せしむる事を考案した人も有つたが却て失敗に歸した。

人工養殖の技術を施すべき母貝を採集するには潛水夫を使用す、養殖場にて多少の相違はあるが、大抵七月より十月迄に採集するのが多い。三重縣では同地方特殊の蜑婦を使用す。蜑婦は白筒袖の襦袢を着し腰卷を纏ひ、頭髪を束ねて鉢卷を爲し、潛水眼鏡を懸け腰には十數尋の綱を付け、綱の一端には桶を附して、十數名船に乘り込み、採集地に至り、海底に潛入して眞珠貝を採取し、數分間作業を爲して海面に浮び充分呼吸を復活しつ……貝を桶に入れ、再び海中に入り同作業を繰返すのである。

總て母貝は滿二ヶ年のものを採り、核を押入して再び海中へ放養するのである。施技後滿三ヶ年の後に、前同樣の方法により母貝を採集して養殖眞珠を驗し、優良なるものは、貝より切取りて缺圓部を補塡し市場に供給するのである。

養殖眞珠の核は、久しく蝶貝製のものを使用したが、核の光澤反射烈しく眞珠膜(核を包被せる外層)を透視するので、高瀨貝製の核に改良したが尙透視を免れぬので最近はドブ核(支那淡水産の貝にて製すドブ貝核の略稱)を使用する事に改良し、技術も大に進歩し、歩留りも能く、大型の核を挿入して効果を擧ぐる樣になつた。又最初挿入の核を除去し、內部を洗滌して新核を塡補し、或は各種の染色核を塡充して有色眞珠を製出する樣になつた、前記の眞珠を貝附き眞珠と云ひ、缺圓部を補塡することを裏張と云ふ。

□裏張法　蝶貝又はドブ貝を使用する、

一、裏張すべき貝殼の兩面を研きて板と爲し、眞珠の大小に應じ八角形のものを作り置く、

二、圓錐にて貝釦を抜くが如く、貝附眞球の周圍を繰抜き、喰切にて其周縁を切り取りたる後、鑢にて仕揚げ底部卽ち眞球核の附着せる母貝の貝殼を磨く時は、挿入核が現出する事となる、然る時は此核を抜取りて新核を塡充する、

三、眞珠に適應せる八角形の板を粘着す、（一の工程を終りたるもの）

眞球に合はし鑢にて菱形丸味を附け、溝研石に掛けて磨き更に仕揚げる。

人工眞珠養殖場の主なるものを左に揭ぐ

三重縣志摩郡的矢灣渡鹿野

同　英虞灣神明、濱島、船越、

同　度會郡五ヶ所灣中島

同　慥柄灣

和歌山縣北牟婁郡錦、尾鷲

同　東牟婁郡勝浦、下里

同　西牟婁郡瀨戸、新庄、西富田

同　海草郡大崎

高知縣高岡郡須崎

同　幡多郡宿毛

愛媛縣南宇和郡御莊

長崎縣東彼杵郡大村

同　西彼杵郡大串

石川縣鳳至郡穴水

就中、英虞灣は御木本養殖場、五ヶ灣は日本眞珠株式會社養殖場、御莊は豫土水産會社養殖場、大村は大村灣眞珠株式會社養殖場、大串は渡邊理一氏の養殖場の所在地で、有名なる眞珠の産地である。

□まべ養殖と黑蝶貝養殖眞珠　まべは黑蝶貝に似て長く周縁部は帶褐色を呈し、漆黑の外皮を被り外觀烏帽子形に能く似て就る。琉球南部の海に産し長大なるものは高さ一尺五寸に餘るものがある、數年前より人工養殖眞珠を試み相當の成績を擧げて居る。殼長大なる故貝核の直徑三分五厘乃至五分のものを挿入し大なる養殖眞珠を獲りつゝある、併し有色なるは止を得ぬ。

黑蝶貝は直徑五寸内外、眞珠貝よりは大きいが貝殼の兩殼間の狹き故、餘り効果を得られぬといふことである。

□眞圓養殖眞珠　人工の核を與へて天然に等しき圓形の游離眞珠を得る事が養殖眞珠の理想である。御木本式は速成的であるが、貝附であるから理論上眞珠と云ふ事は出來ぬのである。御木本氏の妹婿故西川理學士は此理想を實現せしめんとし淡路福良灣内に眞珠養殖場を設け、多年苦心研鑽の結果、遂に人工游離眞珠を完成せられたのであつたが、間もなく長逝せられたのは、誠に痛惜に堪へぬ次第である。

（圖版第三十圖二）

眞圓養殖眞珠は直徑一ミリ乃至一、五ミリの鉛質核を、特殊の裝置により眞珠貝の外套膜の組織中に挿入し、五ヶ年後に眞圓眞珠を完成するのであるが、年月長きに比し、包被層薄く、色澤劣等のもの多く、營利上不成績を免れぬのであつたが、近來前記の鉛質核に代ゆるに、貝製の直徑三乃至四ミリのドブ核を挿入し完全なる理想的眞圓眞珠を產出する樣になつた、其最も優秀なるものに至ては光澤、重量共總て天然眞珠に比し何等の變差を認める事が出來ない、實に眞珠の革命を來たしつ

ゝあるのである。

□人造眞珠　天然眞珠に擬ふべき製造物で有るが、精巧なるものは一見天然眞珠と識別する事困難なる迄に成功したのがある。

外國製の硝子眞珠　大小各種の中空なる硝子球を作り置き、露、獨、墺、佛等の淡水又は半鹹水に棲息するブレークと稱する魚の鱗を、化學的に分解して、其銀色體を沈澱せしめて箔となし、前の硝子球の内面に塗抹して乾燥せしめ、バラフインの蠟を塡充したもので有る。硝子を透して閃光を見るに、優良なるものは天然眞珠に酷似し、識別困難なるものが有る、此の外眞珠光を有する固形體の擬眞珠も出來て居る。生產地は主として佛蘭西、獨逸であり、佛蘭西製の方勝る。

日本製硝子眞珠　前記の外國製硝子眞珠を模倣したものである。各種の直徑を有する、連珠狀の型を作り所要の硝子管を挿入して吹込み、外郭を作り置き、太刀魚の鱗を剝ぎて、揮發油、アンモニヤ、エーテル等にて處理して鹽分を除去し、銀箔

となし、少許のゼラチン液を混じたるものに、前の連珠狀硝子管（串團子の如し）を挿入し其内面に銀箔を塗抹せしめ、乾燥してパラフイン蠟を塡充する事、外國製と同法である。

扨て鑢を用ひて接合部を切り放ちて絲に繫ぎ、長さ十四吋中に二百個を有するものを二百番と稱し四十番に至る、二十二種のサイズあり。右十四吋のもの十二連を結束して一房と云ひ、十房を紙箱に容れ、主として印度へ輸出す。

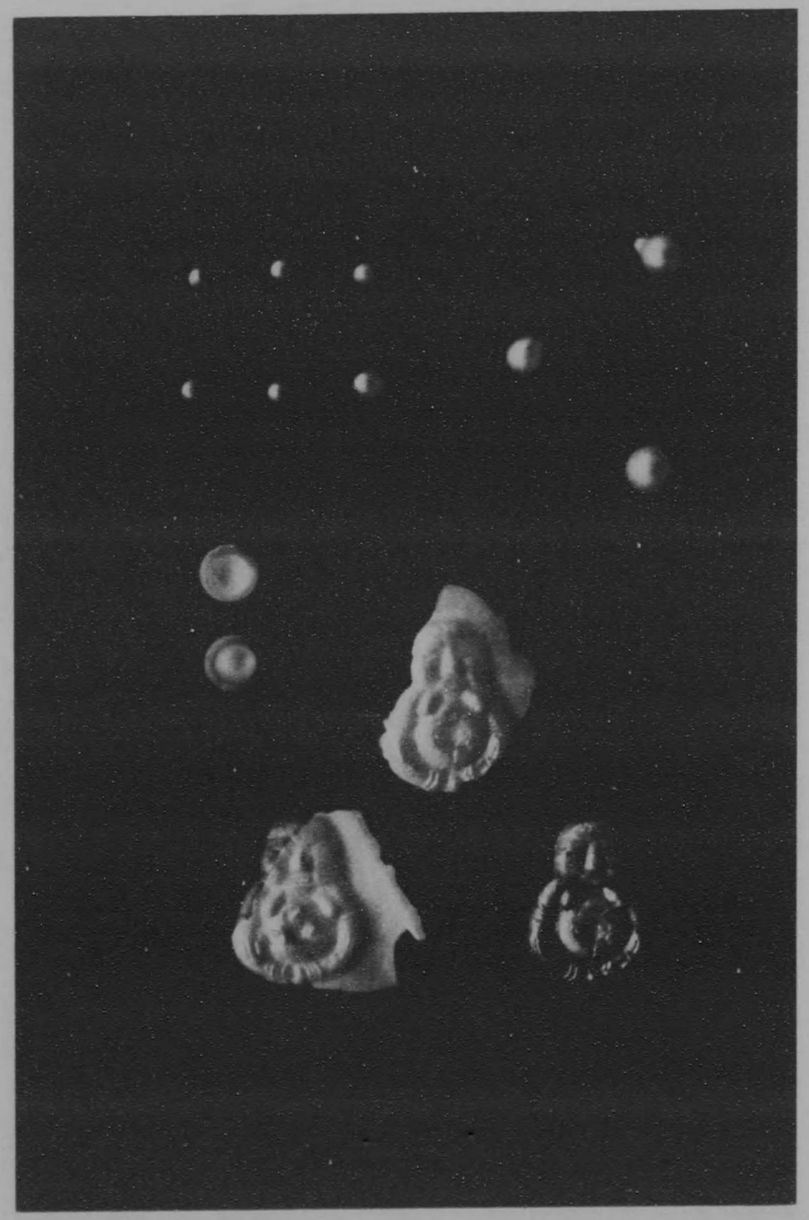
人造不二眞珠　大正四年日本眞珠株式會社の創製したるものでドブ貝製の核に太刀魚箔を塗抹したもので全く前記硝子製眞珠の反對である。近來製造業者も增加し理想的眞珠色に近き優秀品を製出する樣になつた、硬度比重共天然眞珠に近く、百六七十度の熱に耐へ且つ溫湯に浸して容易に變色せざること、及び大小、異形のもの等を自由に作る事が出來ること竝に價格低廉なる等は特長とする所である、又最近銀色の外ピンク、クリーム色等をも出來る樣になつた。

二　眞圓養殖眞珠（貝核）　四　支那養殖眞珠（膜と核）　鉛製の核

膜

一　同　上（鉛核）　三　貝附養殖眞珠（膜と核）　核に膜の附着せるもの

中央に光れるは核　周圍は膜



第一十三圖版—第三十一圖

一　同　上（縦断）

二　眞閉、養殖眞粒（貝殖）

三　貝柱養殖眞粒（殖え盛）　中央に於ける中　眞は閉じ　殖え盛

四　支柱養殖眞粒（殖え盛）

殖の斷面

のものを柱の斷に殖

美久仁眞珠　魚類の眼球を化學液に浸し、眞珠色の膜を包被せしめたるものである。只重量輕く硬度前記の人造眞珠に及ばないのが缺點である、尙一層の改良を要すべきものと思ふ。

□眞珠の用途　昔眞珠を果汁に溶解したるものは萬病に効ありと云ひ、粉末と爲し眼病の靈藥とて貴重した、蜆眞珠は黃疸症に卓越したる奇効を有するとは久しく人口に膾炙する所である。

眞珠を裝身具に賞翫する樣になつたのは近來の事である、蝶貝眞珠は直徑二分以上のもの多く、耳飾、ペンダント用として價數千金に上り、鮑にも間々大形のものあり用途は同樣である。アコヤガヒ眞珠は直徑一分以下のもの多く、一分五厘以上のものは稀である、特に八方轉の優秀品は近年頓と尠くなつた。主として指輪、ネクタイピンに加工して他の追從を許さゞる獨殊の光彩を放つのである、尤も一分五厘以上のものは大なる程分泌率少き故、價は非常に累加するのである。又同大のも

の數多くを揃へる事も困難であるから、數多き程價は一層累加する事となる、別して四分以上のものは珍中の珍として價數萬金に上るのである、尤も右は八方轉の優秀品に就て述べたものである、小形及罌粟粒のものは裝嵌用として簪、櫛、帶締等に用ひらる。

眞珠の價格　は量目に據り計上し罌粟粒以下のものは一匁に對し、稍大粒以上のものは一個の有する量目に對し、縱令ば一個の量五厘あるものは、五厘珠と云ひ五厘珠一個何程と云ふ、五厘珠は直徑一分五厘乃至七厘を有するものである。罌粟粒の如き小粒にても、一匁拾五圓の價を有し黃金以上の價格である、大體の價を比較せば概略左記の如き標準である。

アコヤガヒ眞珠一個に付

一厘珠	四、五〇円	五厘珠	一二〇、〇〇円
一厘半	七、五〇	六厘珠	一八〇、〇〇
二厘珠	一五、五〇	七厘珠	三〇〇、〇〇

二厘半	二一、五〇	八厘珠	四二〇、〇〇
三厘珠	三六、〇〇	一分球	七二〇、〇〇
四厘珠	七二、〇〇		

一分珠を換算する時は一匁七千二百圓の割合となる。

貝附養殖眞珠は裏張を有するので、全部貴金屬に配して嵌入する、硝子眞珠は穴があるからネクタイピンに加工すれば宜しきも、指輪に嵌入せば湯水に浸す事が出來ぬのと爪の部分自然に缺損を生ずる缺點がある、人造眞珠圓球のものは天然眞珠と同樣加工する事が出來る、一孔を穿てるものはネクタイピンに、貫通孔を穿てるものは頸飾、根掛等に用ひ、天然眞珠に匹敵する事が出來る、異形のもは耳飾り、ペンダント等に用ひて立派なものである。

貝の應用　前條には貝の利用に關する事のみを記述したが、以下少しく應用の方面並に貝に關係ある事項と最後に利用、應用に就て分類的に其の要領を列擧して見たい。

應用と云ふのは主として貝の形を模したる器物及び圖案等に適用せらるゝものを指すので、大底は裝飾的且つ美觀を目的として考案されてある。陶磁器製の鮑及び蛤形の菓子鉢、蓋物、皿、榮螺の杯、蓋置、帆立貝の皿、鉢、金屬製榮螺の蓋置、文鎭、刀劍の目貫等にも應用せられ。西洋建築の破風には、琿渠を圖案化したるもの兒童、が琿渠を捧げたる水盤等があり。友禪染には貝盡し、貝桶と蛤等の模樣がある。古羅馬、シ、リア、希臘、埃及、ジャバ、トラバンコール等の貨幣には貝の圖がある。西亞弗利加のベニンにては寶貝とコロンベラの貝形銀貨を流通した。我國の舊紙幣明治通寶の裏面には帆立貝の圖がある、要するに通貨は帆立貝の如く轉々流通して止まざる意を表はしたものであらう。トラバンコールの郵劵には同國の

國章たるシャンク貝の圖と透しがある。ハバナの郵劵にも貝の圖がある。家紋（紋所）にハマグリ（一ッ蛤、三ッ蛤、四ッ蛤、五ッ蛤、向ひ蛤、丸に一ッ蛤、丸に二ッ蛤、丸に三ッ蛤、三ッヨセハマグリ、ヒラキハマグリ、マムキハマグリ、丸に尻合せハマグリ）イタヤガヒ（イタラ貝、四ッイタラ貝、五ッイタラガヒ、向ひイタラ貝、離れ三ッイタラ貝、丸に一ッイタラガヒ、丸に三ッイタラガヒ、三ッ頭合せイタラ貝、二葉イタラガヒ）等がある。

謠曲玉の井に貝づくしあり。

酒宴をなしてかひ〴〵しくも、あわび貝の盃に、いたらがひの銚子を出し、美目よき女郎貝に、をしやくをとらせ、みぎはにいたら貝、すだれ貝を掛けならべ、紅梅木になく鶯のとり貝も、有明の、西にかたむく、月も赤がひ、くもらぬ時をふくほら貝は、天地人の、さゞゐとなりて納まる海中に入りにけり。

俗謠ぢんぐ〳〵節の貝づくし。

磯のあわびで、あの片思ひ、心の内は赤貝で、せめて蜆のあの貝程に、やきとりがひであるなれば、わしやどぶかひにあのうれしかろ、世間の口にあさりがひ、されよが、すこしもからすがひ。

和歌、俳句、に貝を詠へるもの多くあれど總て省略することゝする。

貝に關する傳說と迷信

□不食貝、安藝郡田野浦の西に十ノ濱（唐の濱とも書）此所にて昔弘法大師、蛤を見玉ひ是は何貝と尋ね玉ひしに、これは喰ぬ貝と答へしよりこの所の蛤は、中は砂ばかりにして身はなしと云ふ。

□袖貝、幡多郡周防潟の沖に袖かゝりの岩と云ふ巖あり、往昔元弘元年一宮尊良親王幡多に配流なりしに、京都にて今出川公顯卿の女を御妃となされ、御中睦しかりけるに依て密に秦武文迎に京都に上り、御妃の御供して土州に下らんとするに、攝津國尼ヶ崎にて肥前國の士松浦五郎と云者、妃を奪取り己が舟にのせて行方しらず成ぬ、妃甚悲ませ玉ひ、御めしの衣片袖を斷て海中に投入玉へば、この御袖流來て此巖にとゞまると云へり、その袖、貝と化して形袖に似たり、今もたま〳〵是を得るものあり。（以上土陽淵岳志より）

註　袖貝は *Gomphina melanegis* Romer. ヨメマガヒ（目八）の事である、他國產の貝に比すれば、斑紋甚だ美麗である。

□貝に關する土俗

蝸牛を食へば虫藥になる。

干田螺（時季には生がよい）を旅行先で食へば水あたりをせぬ。

蜆汁を食へば黃疸がなほる、寢冷へせぬ、蜆眞珠は黃疸症の適藥。

烏貝を食へば胎毒を消す。

貝殻を燒いた灰を附けて瘡を治す。

鮑を食へば眼が爽になる依て、石決明と書く、岩手縣地方では婚禮の御料理に金海鼠(きんこ)と鮑貝(貝殻のまゝ)を必ず膳に附ける、是れ陰陽に象るのだと云ふ。

新潟縣では婚禮の御料理に、鮑の貝殻の中に摺身を入れて蒸したるものを用ふと、鮑貝は片々で男子にたよると謂ふ意味か?

子安貝を分娩時に握れば安産をする。

□越後國人貝　越後の福しまといへる所夜な〳〵光り物出るゆへ柴田忠太たといへる人見屆に行しがかのもの申樣當年より五ヶ年の間大豐年なり然れ共十二月より惡風吹病はやり世界の人多く死すもしこれをまぬがれんとならば我姿を書寫し家の内にはり置くべしと告て海中へ飛入畢、嘉永二年閏四月云々、一枚摺ものである。

□貝中化生七佛　御佛の不思議を現はし給ふとはかねゞ〳〵耳にせぬにはあらねど

貝中化生七佛

別に心のそこより信ぜざりしに維に明治己亥歳一月八日或る老人の浪速濱より得たる種々の貝を持來りしを買ひ置其内の一つの貝を何となく後に見しに不思議や裏面にあり〳〵と佛像あり如何なる緣哉と疑は變りて喜びとなり法の道に入ることを得たり就ては有緣の方々に廣く見せばやとてつゝしんで御像をうつす。

明治三十二年五月中旬

右は佛像を御厨子に納めて諸國を歴りて開帳せし事ありしを友人金丸但馬氏伊勢一身田に於て拜觀を得、記念にもとて摺物を購ひて軸物に仕立てしを小生に贈られたるものである、佛像は正しく支那養殖眞珠の佛像附着のものである、大阪へも來たことあると聞及んだ。（圖版第三十二版）

□迷信の貝種々　明石の北四里、神出村に雄岡雌岡と云ふ二つの山があつて、雌岡の方には羅石神社（裸石と書て居るが誤り）と云ふ大なる陽石を祀る有名なる性的の神がある、女下の病、妊娠を祈れば靈驗ありとて數里の遠方より詣ずる人、今尚絶えぬのであ

る、滿願になれば願開きと云ひ鮑又は螭の貝殼に年齡を記して神社へ奉納する、又此石の近くに陰石(?)あり此方は男子が祈願を籠め貝を奉納する事は陽石社と同じである。

鮑の貝殼に「さゝら三八郎宿」「鎭西八郎爲朝宿」など記して戸口へ釣し置けば惡病に權らぬと云ひ、アクキガヒ(惡鬼貝)を戸口へ釣し置けば魔物を拂ふと云ふて居る。

ヂストマと貝類

地方病として最も恐るべき、日本住血吸虫病(廣島縣では片山病、山梨縣では山梨病と云ひ、地方により名を異にするから、桂田博士の命名せられし名を揭ぐ、尙別項片山病參照)は人體の皮膚より感染後二週間で成虫となり雌雄異體である。

(是亦日本住血吸虫の特有)雄虫は長さ一六ミメ內外口吸盤と稍其下部に腹吸盤あり、體は圓筒狀の所謂抱雌溝を形成し、雌虫は細く雄虫より遙に長く長さ二一、八ミメ內外あり又口吸盤と腹吸盤とを供へ雄に抱かれて居る、腹吸盤により血管壁に附着し口吸盤より血液を攝取して棲息する感染後三週間以後には產卵する。若し多數の寄生を見るときは其宿主は四週間乃至十週の間に斃死するものが多い。

□肝臟ヂストマ　篦形二口虫とも云ひ、人體肝臟に寄生する重要なる地方病の一である、本虫は明治八年石阪氏が始めて人體に寄生する事を發見せられ、爾來幾多の學者が熱心なる研鑽により、同四十三年小林晴次郎氏は中間宿主たるべき數種の

魚類に就て發表し、大正七年二月武藤昌知氏は第一中間宿主のマメタニシなる事を確定發表せられたので本ヂストマの感染經路は明瞭となつた。最初虫卵は第一中間宿主なるマメタニシの肉中に入り、セルカリアと成つて第二中間宿主なるイシモロコ（最も多し）ハエ、フナ等の鱗、鰓、鰭等に附着して包嚢幼虫となり、人類が中間宿主たる魚類を生食又は半煮の儘食することにより人體住所肝臓に寄生するのである、成虫は長さ一三乃至一九ミメ幅三又は四ミメ長楕圓の扁平なるもので、口吸盤と腹吸盤とが有る、即ち篦形二口虫の名の依て起る所以である、本虫は雌雄同體で約一ヶ月にて產卵し、前行程を繰返すのである。

本病の流行地として最も濃厚なるは岡山縣兒島郡、都窪郡である、其他宮城、滋賀、愛知、佐賀、新潟の外各府縣に亘りて廣く分布して居る、要するに第一中間宿主マメタニシを伴ふのであるからマメタニシの發見撲滅は素より魚類の生食、流水の飲用等を禁ずることが肝要である。

□肺臓ヂストマ　前者に比し流行地は狹少である、成虫は長さ一〇、八幅五、八ミメ内外の球狀體である、口吸盤、腹吸盤を有し肺臓に寄生し、虫卵は咯痰に混じて排出せられ、第一中間宿主なるカハニナに入りセルカリアとなり、第二中間宿主サワガニ（タカヾニ、タニカニ）モクヅガニ（太郎兵衞ガニ）シャハイ（臺灣土語）クサガニ（ケトガニ）ザリガニ等の淡水蟹の鰓及肉中に浸入して包嚢幼虫となり、人類の蟹を生食、半煮酢漬等にて食する時は腸より肺に浸入して成虫となり寄生するのである、間々腦髓に寄生する事もあると云ふ事である、依て蟹を食するは勿論、蟹の住する河水を飲用し、食器食物を洗滌する等は避けねばならぬ。

□横川氏吸虫　(Metagonimus Yokogawai Katsurada.) 微小なる球狀吸虫である、第一中間宿主カハニナに入り、セルカリアとなり第二中間宿主アユ（鮎に最も多し）鮒、鯉等の淡水魚類の鱗、鰓等に無數に附着して包嚢幼虫となり、人體の小腸に寄生し約一週間にして產卵する、大抵の鮎には多數の幼虫を附着して居る、虫體が微

小なると小腸に寄生するとに依り、人體に大害を與へず、驅除藥の奏効容易なるは稍心を安ずることが出來る、併し宿主たるべき魚類の生食、酢漬、半煮鹽燒等は注意する必要があると思ふ。

前記の外牛に多く寄生する肝蛭（肝臓ヂストマより大形＝人にも）卵形メタゴニムス（鮒に多）ヘテロフイス（ハエに多し）エキソカスムス（鮎に多し）廣節裂頭條虫（鮭、鱒類の肉中に）無鉤條虫（牛肉に）蛔虫（野菜又は飲料水より）蟯虫（小兒に寄生し、肛門より自己感染）十二指腸虫（皮膚より感染し間々口よりも）マラリア（蚊）等何れも多くは飲食物の經口的であるから、日常の食物には多大の注意を拂ひ、一般衛生上の知識を涵養することを怠らない樣にせねばならぬ次第である。

□食用貝の分類　或地方ではヒザラガヒ（八枚貝）類、笠貝類、寶貝の類に至るまで大抵の貝類を採て食用とする、カハニナを茄で、お八ッに。味噌汁に投じて食する所もある。阿波の國では蝸牛を子供等が燒てお八ッに食ふさうである。併し貝類中には全く食ふ事の出來ないものもある、實は一般の食膳に上される貝類は極僅かの種類に止まり、其内の主なるものは鮑、トコブシ、榮螺、天狗螺、バイ、赤螺（以上卷貝）アカゞヒ、サルボウ、ハヒガヒ、貽貝（瀬戸貝）眞珠貝、牡蠣類、タヒラギ帆立貝、板屋貝、蛤、アサリ、オニアサリ、カゞミ貝、ワスレ貝、スダレ貝、ウチムラサキ、アゲマキ、オホノガヒ、マテガヒ類、バカゞヒ、シホフキ、ウバガヒ、ミルクヒ、オキアサリ、コタマガヒ、沖蜆、磯蜆、フヂナミ類、（以上二枚貝）タコ類、イカ類、（以上頭足類）等である。調理法により分類して見ると左の如きものである。

- 生にて
  - 刺身用　鮑、赤貝、イカ、鮑(粕漬)。
  - 二杯酢　牡蠣、赤貝。
- 茹でて
  - 二杯酢　トリ貝、タヒラギ。
  - 酢味噌　トリ貝、赤貝、アサリ、マテ。
  - 味噌掛　板甫蠣。
- 煮て
  - 煮附け　鮑、トコブシ、榮螺其他一般。
  - 佃煮　蛤、蜆、アサリ、牡蠣。
  - すき焼　牡蠣、蛤、アサリ、トリ貝。
- 汁
  - 味噌汁　蛤、牡蠣。
  - 雑炊　蜆、アサリ、牡蠣。
- 焼きて
  - 附け焼　牡蠣。
  - 干したるを焼く　板甫蠣。
  - 殼の儘焼　トリ貝、バカ貝、ウバ貝、蛤、鰒類、ホシタロ。
  - 貝煎餅　蛤、榮螺、赤螺、帆立貝。
  - 西洋食　アサリ、バカ貝等にて製す。
- 乾し貝　牡蠣、板甫蠣。
  - 蛤、バカ貝、ウバ貝、トリ貝、アゲマキ、マテ、ハヒガヒ、貽貝、鮑、帆立貝柱、イカ、タコ。

- 製造物
  - 罐詰
    - トコブシ、榮螺、板屋貝、磯蜆、蛤、タヒラギ柱、赤螺、牡蠣、アゲマキ、ウバ貝
    - 蛤、牡蠣等の煮汁より、エキス、グリコナール錠等を製す。
  - 滋養劑
- △貝殼加工物
  - 菓子鉢　鮑、螺貝、池螺貝、烏貝。
  - 花生　夜光貝、天狗貝(鉤花生)管貝。
  - 一部加工貝
    - 杓子　帆立貝、板屋貝。
    - 鍋代用　帆立貝、鮑。
    - 手鹽皿　月日貝、池螺貝。
  - 切貝　鮑。
  - 加工品
    - 摺貝
      - ○マベ、○池螺貝、△鳥貝。
      - ○厚摺のみ、△薄摺のみ。
    - 貝粉　鮑、夜光貝。
    - 玉　螺貝、夜光貝、高瀬貝、琿渠。
    - 碁石　蛤、琿渠。
  - 胡粉　板甫蠣、　。
  - 貝灰　灰貝貽貝、螺、帆立貝、鮑。
  - 染料　イカの墨汁よりセピアを製す。

貝類の採集と標本の保存法

採集用具

普通ピンセット　曲折ピンセット

特殊ピンセット　先端椀形に作れるもの

ピンセットは成るべく短く細きものが便利である、特殊のものは小貝を挾むのに都合がよい。

蠣剝き　一　梃

幅五六分長二寸、薄き彈力ある金屬にて作り木柄を附けたるもの。

岩石に附着する貝類を取るに用ふ。

古出及鎚丁　一　梃

蠣、キクザルの類を離す時に用ふ。

金槌　一　梃

槓杵兼用のものは便利である。

管瓶　十數本

直徑五六分長三寸内外のもの。錠劑入の古管瓶にて結構である、小貝を入れる。

小箱　數個

明箱有合せのもので澤山である、破損し易き貝を入れる。

郭大鏡　一　個

繰出しよりはスタインハイル郭大鏡の方が便利である、小貝を鑑別するのに必要である。

齒刷毛　一　本

剛き毛がよい、貝の汚物を洗滌するに用ふ。

硝子製上等肉池　一　個

小貝の習性を研究するに便利である。

輕便焜爐　一　個

小鍋　一　個

金鋼　一　個

貝の肉を抜く爲に使用す。

眞鍮針金　二三本

縫針以上の太細取交ぜ二三本を用意し、肉を引出す時に用ふ、一端は尖らし折曲げて置く。

古斯聞紙　數枚

肉を抜きたる貝を乾燥する時、又は標本を包裝するに使用す。

た　わ　し　　一　個

大形の貝殻を洗滌するに用ふ。

ワイヤ、ブラシ　　大小二三本

梳綿機に取附けた古手で結構である、長さ四五寸、半巾又は三分一巾に切取り、七寸計りの板に打附けて鑢の如く使用す。ワイヤ、ブラシを切るのは切り取る箇所にある、ワイヤの一列を拔取つて鋏で切る、貝殻の附着物を除去する爲に必要である。

直　徑　尺　　一　本

表曲尺、裏ミリメートルのが便利である、貝殻及動物體を測定するのに必要である、

切　出　し　鎚　丁　　一　梃

貝殻の附着物を除去するのに必要である。

貝類の採集には數々宇宙の大自然に觸接する愉快と、造化の巧妙を極めたる標本を得る歡びとは迚も筆紙に現はすことが出來ぬ。其採集に當つては先づ生活の狀態及び習性を知ることが必要である、小貝は硝子器に入れて觀察し、必要に應じて一々スケッチを取つて置く。而して採集の方法は陸產及び淡水產、海產の沿岸のものは容易に獲ることが出來るが、湖川、海中のものはドレッヂを使用するのが、普通の方法であるが相當の費用を要し個人採集法としては不經濟であるが故に、簡易採集法としては漁夫の魚貝採集時に依賴するか、自から漁船に便乘して漁網に附着した貝を採集するのである。特にトロール漁船は理想的であるが、漁網の操業上漁夫の諒解を得ること困難であると考へるから、地曳網、たて網等の網仕舞を利用して採集するのは、輕便であつて而かも割合良好の標本を得ることがある。前述の如く漁網を利用する關係上、地方により採集季を異にして居るが、主として深海產のも

のは冬季より春季に掛けて好時季である、沿海産のものは四五月が採集に最も好都合である。陸産の貝類は梅雨期の前後が採集に好時季である、殊に降雨の跡が都合がよい、冬季は土中に潜入して採集不可能である。又針葉樹林、高山等には棲息しない、濶葉樹のある社寺の林は好適の採集場所であるが密林は却て不可である。多くは朽木或は朽葉の下に附着し、塵捨場、石塊、石崖等の濕潤なる場所に棲息する。微小なる種類が相當に多いから、同一場所でも絶へず注意を拂ひ搜索することが肝要である。陸産は採集の時季が六ヶ敷いが、群集して居ることが多いから、意外な珍種を多く採集し得ることがある。

淡水産の貝類は種類も尠く採集は割合に容易であるが、微小種は相當深所に棲息し、又は沿岸の水草又は沈澱物に附着して居るから、相當の注意を怠らぬ樣搜索することが肝要である。

海産の貝類で沿岸の岩石に附着する、ヒザラガヒ、カサガヒ類、アハビの類は岩

に密着して引放す事が困難であるから、蠣剝き又は薄刃の類を腹面（前後に長いから短かい方）に差込めば容易に放すことが出來る。岩石に穿孔するカモメガヒ、ニホガヒ、イシワリの類は金槌にて岩石（多くは泥岩である）を打破り、貝殼を毀さぬ樣且つ分離せぬ樣に一種毎に揃へて箱に仕舞ふて置く。キクザル、チリボタン、カキの類は古出刃鉋丁を用ひて、貝殼と岩石との中間を强く打てば分離する、尤もチリボタン、キクザルの類は擬體をして居るから、能く注意することが肝要である。ツメタガヒ、カニモリガヒ、キセワタ、ムシロガヒ等の類は砂泥中に潜入して居るから、海濱を能く注意し砂が少しく盛上つて居る樣な箇所を堀れば貝を得ることが出來る。イガヒ、ヒバリガヒ、クジャクガヒの類は纖毛をナイフで切る必要がある。アコヤガヒ、タヒラギの類も纖毛を出して附着して居るが、稍深き所であるから潜水するか、相當の採集器を使用することが必要である。貝殼の外面（アハビにはイソチドリ、キクスヾメ、クルスガヒ等が附着して居る）死殼の殼口內（ヒラフネガヒ

カキ、ナミマカシハ等）殼軸の内側（ヘノジガヒ）或は海岸にある石塊の裏面にはイソコハクガヒ、ミヂンツ、ガヒ等の小貝が附着して居る。又海藻には微小なる貝殼が附着して居るから、常に細心の注意を拂ふことが肝要である。

海中に棲むマテガヒ、ムラサキガヒ、ウチムラサキの類はマテツキを使用し、深海産のものはドレッヂ又は延繩（又はひなわ）を使用する。

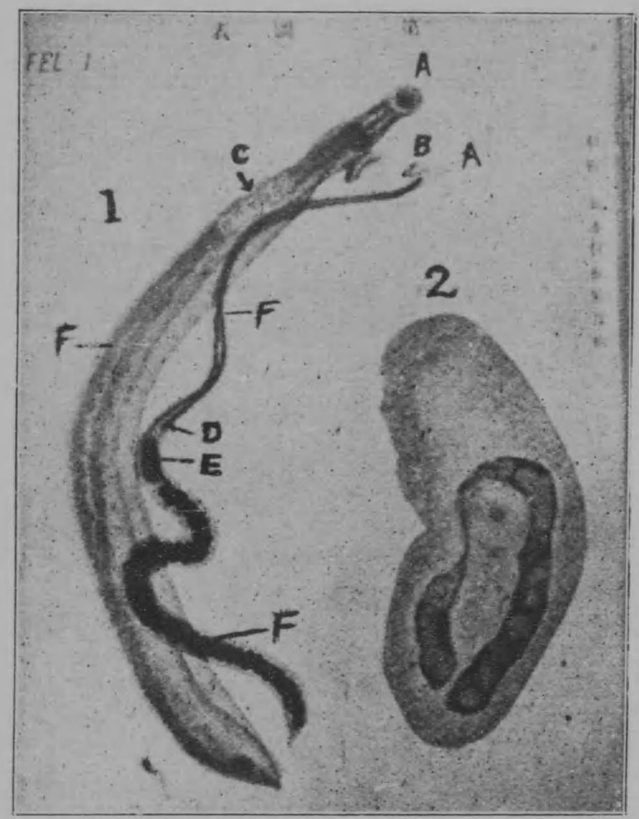
理想的の標本　標本は成るべく優良なるものを採集することに心懸けねばならぬ理想的の模範標本としては左の三條件を完備したものを必要とするのである。

一、生貝（いきがひ）卽ち生活せるものを捕獲すること。

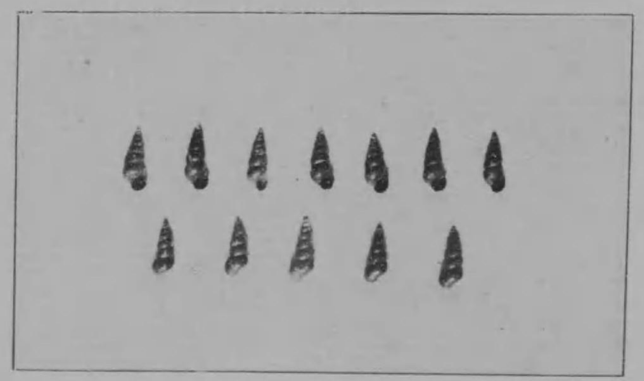
二、完全に能く發育し、且つ缺損なく而かも大形なること。

三、色彩、光澤共美麗なるもの。

卷貝なれば胎殼を存し、殼口其他に缺損なく罅（へた）を有するものは罅を添附するを要し。



1日本住血吸蟲雌雄　2同上幼蟲
A口吸盤 B腹吸盤 C睪丸 D子宮 E卵巢 F腸管



Blanfordia nosophora Robson.
（瀨戸）（ひがまやたか）
備後片山産

（桂田博士承認轉寫）

矢倉—貝類叢話圖版—第三十三版

二枚貝なれば靭帶附着のまゝ肉を去り、主齒側齒共完全にて、內外共艶美しきものなることを必要とするのである。

事實上此理想的標本を得ることは甚だ困難である、種類によりては貽殼を完全に保存せるものと、貽殼の缺損し易きものとあり、又髓を得ること殆んど困難なるものがある。是等の多くは產地で髓を投棄して顧みぬからである、（ホラガヒ、芋貝類、筍貝類、筆貝類等）又小貝類は一々髓を保存することは容易で無いから、多少の缺點は大目に見ねばなるまい、併し二枚貝の主齒缺損なきものは是非得たいものである。

又生貝（いきがひ）を得ることは望む所であるが、肉附のもので缺損したのよりは、肉が無くとも貝殼の完全な方を採る。珍稀品ならずも初めて採集し得たる貝は、鄭重に保存して置き、他日完全品を採集し得たときに取替へる樣にすればよい。

幼貝と老貝　幼貝は研究上必要ではあるが、標本としての價値は無い所謂不合格

品であるから幼貝は採集せぬ様にする、且つ又種族保存上幼貝は放養してやるよがい、所で此幼貝と老貝とを識別することは中々六ヶ敷いのである、特に微細なる幼貝（貽殼程度のもの）と微小種の幼貝との差別鑑定は一層困難を感ずるのである。

陸產の發育したる貝殼は、殼口厚く反曲するのを普通として居るから、殼口の薄きものや、反曲なきものは幼貝である。又反曲せずして老成する貝は其終曲部が滑かであるものは老貝であつて、鋭きものは幼貝である。微小なる幼貝は郭大鏡を用ひて貽殼と螺層との發育程度を比較すれば略ぼ推定することが出來る。他の淡水產、海產の貝類でも殼口の滑かなるか否かを見れば鑑定することが出來ることは同一である。

總して幼貝は貝殼薄く、彫刻、色彩等鮮明であつて、眞珠光澤を有するものは一層閃光を呈して美觀である。老成すれば貝殼の厚さを增し、殼口は滑かとなるが、光澤は漸次減少して來る。

二枚目の幼貝は概して放射條紋を有するものが多く、老貝との差甚だしきものがある、シヾミ、バカヾヒ、イタボカキ、コケゴロモ等の類である。要するに此老幼貝の鑑定は研究の第一歩であつて、而かも困難なる事蹟の一つであるといふことが出來る。

標本の處理　第一に肉を拔き取るのである、陸產は先づブラシを用ひて貝殼の汚物を洗滌し置き。別に鍋の七八分目の容量に湯を沸騰せしめたる中へ蝸牛數個を投入し、二三分時を經て一端沈みたる蝸牛の浮揚つた時、金網にて掬ひ取り、貝の暖かき間に肉を拔取る樣にする。卷貝の肉は頭部の稍後方に俗にモドリと稱する筋肉があつて、體の脫出せぬ樣、殼軸の下部に附着して居るから、肉を引出す時此部分を脫離せしむる樣に手心をすることが肝要である。半煮又は煮過は何れも肉拔けの惡いものである、若し肉切れ殘りたる時は、針金を突込みて引出すがよい。殼頂部に肉殘りたる時は、殼中に水を注ぎ右手に貝殼を持ち、左手の掌上を强く打てば反

動にて大低は飛出すものである。肉を抜き終つたときは能く水洗して、水を切り新聞紙の上に並べて水分を取る。水を振出すには殼頂を上にし、殼口を稍右にして、螺旋と同方向に貝殼を烈しく回轉すれば、水分は盡く奇麗に出て仕舞ふ。若し殼中に音を發することが有れば、夫れは貝殼中に肉の殘留して居るのであるから、貝殼中に水滿たしを同方法を繰返せば肉を脱出することが出來る。

淡水產、海產の貝類は蝸牛の如く時間を測定する必要がない、磨のあるものは一々磨を失はぬ樣に處理することが必要である。

小貝の類は洗滌することも、肉を拔取ることも不可能であるから、先づ管瓶へ少し許の細砂を投じ貝殼を混じて徐々に輕く管瓶を左右に動かすときは汚物は自然に拭はれ奇麗になるを度とし、水中に投入すれば砂は沈澱して貝殼は浮き上るから金網にて掬ひ取り、アルコールの稀釋したるものに投じて新聞紙上に取上げて蔭干とする。

海產の貝類は只水洗のみのものと、附着物を除去するもの、藥品を使用して洗滌するもの、藥液中に浸して洗滌を要するものとがある。

一、水洗のみのもの　光澤を有する貝は絕對に藥品を使用することは出來ない。

寶貝類　ホラガヒ、筍貝類の一部(琉球產の大形種)及び二枚貝の大部分等である。

寶貝類は產地で生貝を砂中に埋沒し置き、肉の腐蝕するのを待つて取出したものである。二三時間清水中に浸し、たわしで汚物を洗滌して日光に乾かす、生肉の殘つたものは中々厄介である、又數時間水に浸せば光澤を失ふことがあるから注意すべきである。

ナガニシ、テングニシ。アカゾヒ、サルボウの如き剝脫し易き薄皮を持て居る貝はたわしで緩く洗滌する。

カラスガヒ、ドブガヒ、タヒラギの類はキリダシにて柔かく附着物を除き白湯

を用ひタワシにて擦り、清水にて洗ひたる上水氣を拭ひ、蔭干とする、日光に直射すれば龜烈するから、注意すべきである。

二、附着物を除去するもの、ホラガヒ、カヅラガヒ、ヤツシロガヒ等の光澤ある貝に、セルプラ(虫の類)又は石灰の附着せるものは、キリダシにて附着物を削り取るか、又はワイヤブラシを用ひて擦り取つて水洗する、決して藥品を使用することは出來ない。

三、藥品を使して洗滌するもの。アハビ、サヾエ、袖貝類は海藻、藤壺、他の貝類が附着して居るから、キリダシにて能く削り取り、穗鹽酸(貝殼に塗抹し泡の出る程度のもの)にて洗滌する、但し眞珠層には絶對附着せぬ樣に注意を必要とする。

ホタテガヒ、ナデシコガヒ、ヒアフギ、キンチヤクガヒ等の如き美麗なる色彩を有する貝は極薄き稀鹽酸を用ひ洗滌する。

藥液を使用したものは直に清水中に投じて、能く洗ひ乾燥してから、剛きブラシにし磨擦して艶を出す。

四、藥液中に浸して洗滌を要するもの、筆貝類芋貝類中の大形種は薄き表皮を被つて居るので、稀鹽酸(極薄きもの)液中へ約十分間投入して置き、表皮の剝脫するを見計ひ取揚げて、ワイヤブラシにて能く研磨し、清水にて更に能く洗ひ乾燥する。

ウミギク、チリボタンの類は汚物、石灰質等を附着し洗滌に困難であるから、稀鹽酸液中に投入し置き、汚物の自然に浮き揚がるを待ち、タワシ、キリダシを使用して能く手入れを爲し、剛きブラシを用ひ叮寧に突刺の表裏を洗ひ、更に清水中に投じて能く洗滌して乾燥するのである、艶を出す方法は三と同じである。

標本としての手入れ　ヒザラガヒ類は板面に附着せしめ、體の延びたるとき、絲

にて縛り其儘乾燥して、肉の儘保存するか又は肉を抜き取つて置く。カサガヒ類は直に肉を抜き取て置く。罅のあるものは殼口内へ木綿(きわた)又は脱脂綿を押込み、罅に不易糊を附けて原位置に押込んで置く、併し膠質の罅(ツメタガヒと同質のもの)は虫害を受けるから糊を附けぬが安全である。

二枚貝は肉を抜去り直に絲にて縛つて置く、乾燥するを待つてゴムペーパーを細く切り、腹緣の前後二ヶ所に貼り附け開殼を防く。數々開閉し又は靭帶の離れたものを取扱ふ時は、主齒、側齒の缺損を來たし、時としては貝殼を缺損することがあるからである、脆弱なるものは硝子張の紙箱に入れて保存するのが安全である。

カラスガヒ、ドブガヒ及びタヒラギの類は外殼に亞麻仁油を薄く塗れば美しくなる、又貝殼は日光の直射を受け或は間接に強き光熱を受けた場合に龜裂を生ずるから注意し、成るべく蔭に仕舞ふ樣にするがよい。

頭足類(イカ、タコの類)ナメクジ、後鰓目に屬する、アメフラシ、ドラベラ、キ

セワタ、イオリス、ドーリス類及びマクロスキスマ、ツメタガヒ類、オホノガヒ、ミルクヒ、ウミタケ等の酒精漬とすべきものは、コカイン又は抱水クロラールを滴下して徐々に痲醉せしめ、體を充分伸長して死するを待ち、明礬溶液にて固定した後、フオルマリンの三乃至五パーセント液中に浸漬する、浸漬後液が變色するから新鮮のものと取替へる必要がある、標本瓶の栓(摺合せあるもの)には薄き洋紙を狹んで蓋をして置く、斯くすれば瓶を數々開閉するのに都合がよい。

標本の保存　標本の手入れを終つたものは、標本の大小に應じて貼紙(レイブル)(楕圓、圓形等に打抜き裏面にゴム糊を附けたもの)を卷貝なれば殼口又は殼軸の上方に、二枚貝は外殼又は内面に貼附する。此標紙には採集番號又は分類順の番號を書く、次で學名箋を印刷する、學名箋には番號、學名、和名、産地、備考欄を設け、縱一寸一分横二寸三分のものを標準とし、二倍、四倍、八倍掛のものを調製し、又之れに適應

No	
學名	
和名	
産地	

した陳列用の紙箱を用意する。標本は大小に應じて陳列箱に配列するのであるが、其標準は大形のものは一個、中形は二個又は三個、小形は三個乃至十個とし、小形のものは螺頂を底にして管瓶に入れる、微小なる貝は脱出を防ぐ爲め、管口に少量の脱脂綿を詰めて置く、破損し易きもの及び珍稀品の類は硝子張の箱を作り綿を敷いて入れる。斑紋、色彩、形態等の變化多きものは成るべく異つたのを集めることを忘れてはならぬ、又同一種の貝類でも産地を異にしたのは蒐集することが研究上必要である。

研究用としては陳列式に標本を整理するのが理想的であるが、場所を取るから一々陳列箱に入れず、木箱の重ねを作つて綿を敷き、貝を仕舞つて置くのが簡便である、又多數の標本を收容するのには引出箱を作るのがよい、小形の標本なれば一ッの引出に三十六種以上を入れることが出來るから、陳列式の外にも引出箱は貯藏用として重寶である。賞翫用の標本は一重毎に仕切を趣向して拵らへ綿を敷き、形態

色彩等の配合を考慮して貝を收藏すると一段に美觀を呈するのである、尙裝飾兼用として櫻材、紫檀等の良材を使用して仕切箱を作り、表面は硝子張の懸額と爲し、應接室、客室の壁間に懸け或は長押(なげし)上に羅列する方法もある、空間を利用し得ることゝ、美觀を添へ人目を樂ましむる點に於ては優越して居るが、標本を一時に比較研究することが出來ないのと、容器に多額の費用を要する缺點がある。

標本用として撰擇した貝には採集簿を作り、採集の順序により番號を附して記帳して置く。採集簿には採集年月日、番號、學名、和名、産地、採集者名、原簿丁數、備考の各欄を設け、備考欄には採集の場所、氣溫、水溫、深さ等を記入することを

採集簿雛形

年月日	番號	學名	和名	産地	採集者	原簿丁數	備考

陳列臺帳(標本原簿)雛形

番號	番号	和名	産地	個數	年月日	採集者	備考

忘れてはならぬ。更に陳列臺帳或は標本原簿を作成して記帳する、陳列臺帳の方は採集簿と異り様式も多少違へる必要がある、番號、學名、和名、産地、個數、採集年月日、採集者名、備考欄を設け、備考欄には標本の交換、寄贈、購入等の別を記入して置く、尤も分類に準據して記帳することが主意であるのと、他日採集した貝を追加記入する爲め、成るべく餘裕を存して置くのが便利である、又外國産貝類、參考品の類は別に口座を設けるか、別冊を使用する様にした方がよい。

△△△△△ 包裝に就て　採集地にて獲たる標本を自宅へ送るか、又は鑑定、交換等の爲め他へ發送する場合に必要なる包裝法を略記して置きたい。

容器は木箱が安全である、板紙(ボール)製包裝用容器は別として、普通の板紙箱は破壞し易く、鼠力鑑は凹むから不適當である、最も得易き輕便なる密柑箱は重寶である、詰物も古新聞紙で澤山である否寧ろ包裝兼詰物として理想的である。包裝に際しては先づ古新聞紙をまるめ或は古綿の類を底に薄く敷き詰め、重厚なるもの又は大形なる貝を一個毎に古新聞紙にて包み、能く竝べ其間隙には適當の貝か古新聞紙を塡充し、上層には小形なる貝か破壞し易き貝を詰める。小形の散亂し易きもの又は破損し易きものは管瓶、小箱或は有合せのマッチ箱、卷莨の明箱等を利用し綿にて包み、一種毎に名稱、採集地、時日を記したる標紙を入れ更に大形の紙箱に詰める。全體の標本が移動しない様に詰合せをよくし、蓋を打附けるのであるが、釘は餘り長いのを使つたり數多く打附けるのは禁物である。開函に際して蓋を壞はしたり又は震動により標本を破壞することがあるから注意すべき事である。密柑箱ならば八九分の釘を四本乃至八本で結構である尤も總重量により多少手加減を必要とする。

殊に鑑定を請ふ爲に發送する標本は一々番號を附し、産地を附記することを怠つてはならぬ、又包裝も叮嚀に意を用ひ亂雜ならぬ樣、秩序正しく配列することが肝要である。

釘附を終つたものは苧繩か細繩を掛け、宛名、發送者名は蓋板へ墨書し、荷札を附けるのがよい、數量多き場合は麥酒の化粧箱か石油箱が便利である、成るべく箱は淺い方が都合がよい、貯藏用としても……

第七群　切抜帖より

明石見物

蝶八は身の丈け五尺一寸、徴兵檢査の時は尺に足らないで到頭御奉公のならなかつたといふ代物だが水作は憚りながら五尺五寸一分も御座る、その代り歳は蝶八方が九つも上で何方がイロ男だとなると水作遙に及ばぬ、隨つて蝶は粋、水は野暮、蝶に薄い鬚があつて水に花ニキビが咲いてゐる。その妙な二人がハテサテどう氣紛れたもんか遙々と明石見物をしてこますことになつた。何んでもまあ龜の甲よりは年の効とか申して蝶八は水作のドン臭いのから見るとチツとはかり確乎してゐる、それで水作は蝶八を尊稱してオツさんと申上げると蝶八煙の樣な髭をソツと撫ぜ(捻らうにも短いので)水やんソロ〳〵參らうかとある、そのオツさんの蝶八とニキビの水作と三月は三日雛の節句の午後二時十分といふ神戸發の陸蒸氣が豫定の如く三十何分とやら遲れてやつとのことにブーツと出掛るこの時蝶八水作しやうむない顏を見合せて「へ、、、」

さる程に二人を乘せたる列車は舞子が濱に着いた、愈々これからが旅で御座る、處がこの日は途方もないにらい風で松黑く埃白い中國街道を西に向つた二人の姿はハテ何といつたら……左樣々々、白い脚の蝙蝠の化物と申すが良からう。これは蝶八の着想で御座つて「これが」御臺場の跡だつせ」と出來したのは水作、オツさん

は「お前も中々知つてるナ」と賞める。

その邊から埃塗れの家がボロ〳〵とあつてエライとこに舞子介類館がある、こゝからおはいりと書いた土塀と板塀の間の宛で鼠の道の樣な處を入ると蝶やんでさへあの身體を七三にゆがめてゐる、以てそのホツソイこと判る、其處をまアどうやらこうやら拔けるとこれは又入口には似合はぬ立派なもので御座る。學問といふものなしてある蝶やんはイヤもう感心して「ナール程これは面白い、ナール程これは珍だ」なぞゝ頭ばかり振つてるが水やん一向判らぬ、判つたかと思ふと「これはオツさんとなんなしやな」「何が」「法螺貝だつしやろ」「阿房かいナ」なんて叱られたりしてゐる、それかと思ふと蝶やん長者貝といふので綿を數いてるのを見て「貝でも長者になるとにらいもんや、蒲團を數いてる」なんて敎へて吳れる、それから蝶やんの說明によると我國の介類館で一番早く公開したのは是ぢやさうで水作のノロマも大分感心して土產に繪葉書といふものを買ふた。

（明治四四、三、一四大朝附錄）

奇しき片山病

病源は日本住血吸蟲—中間宿主は陸產の貝

片山病は地方病の中でも最も恐れられて居る病氣である、近頃專門大家で此病氣

を研究して居る人も多くあるが是れが豫防法及び病藥に就ては今尙研究中である、實驗報告は數々發表せられ、最近檜林學士の所論は最も其詳細を極めて居る、中間宿主の貝は自分の努めて研究を試みて居る處なので、該病の經路其他に就いて最近病源地に採集を試みた實驗に基いて其大要を記述することにする、

山陽線福山驛から北方約一里、兩備輕鐵横尾驛の對岸數丁、高尾川の堤防に沿ふた三角地點に、片山と云ふ全村四十戸ばかりの小村がある、此村に昔から一種の脹滿症があつて附近の各村にも及び、全く同地方特有の風土病として疑問の種となつて居た、處が明治三十六年河西博士が該病患者の糞便中に一種の卵子を發見して以來、專ら該病の研究を進むるに至り、翌三十七年、藤浪、桂田兩博士が病蟲を發見し、同年度に桂田博士はヂストマの一新種として日本住血吸蟲と命名し、次に大正二年宮入博士が中間宿主たる貝を發見し、茲に於て以來疑問であつた片山病研究の上に一大光明を見るに至つたのである。

片山病の經路を記すと、人體若くは他の動物體より排出せられる卵子から孵化せる胚蟲（ミラシヂユムと稱し表皮に纖毛を有す）は活動し中間宿主の小貝（カタヤマガヒ）に求めて其體内に侵入し、蟲胞子（スポロシスト）を形成して多數の幼蟲（セルカリアと稱して體と尾とより成り表皮に纖毛を有し普通のセルカリアと異る所は尾端分肢せり）となり、更に人體若くは他の動物の皮膚を突破り侵入して靜脈管中に入り心臟、肺臟竝に肝臟等を經て門脈系統中に入り成虫（ヂストマ）と成り多くは腸間膜に寄生する、成蟲は雌雄異體で雄は稍扁平で長く先端に口吸盤がある、且つ下方に腹吸盤があつて管壁に附着する、雌は細く雄よりも長い。而して雄は雌を抱擁して終生離れることなく血管中に棲息して多數の卵を産むのである。

片山病は人類の外牛、馬、山羊、豚、犬、猫等にも感染する、最初セルカリアの侵入を受けると局部赤點を生じ痒痘を伴ひ數時間の後、豌豆大の紅斑を呈し搔抓により皮膚高まり、水泡を生じて所謂カブレを爲し、二三ヶ月の後には腹部緊脹漸次

衰弱を來たす、該地方の罹病者は殆んど慢性の如く數年の久しきに渉つて遂に斃死するに至るものがある、姙娠中の婦人が該病に侵される時は其胎兒にも感染する。

片山病は前記片山附近の外、岡山縣後月郡田上、茨城縣相馬郡、稻敷郡、千葉縣葛城郡、靜岡縣富士郡須津村、山梨縣甲府、東京府北豐島郡志村、赤塚地方、佐賀縣三養基郡基里、臺灣臺中北斗支廳下小浦庄、其他支那、フヒリッピン等にも分布されて居る外、內地にも尙未知の流行地が多くあらうと察せられる、

片山貝はタニシ、カハニナ等と近似のもので、オカマメタニシ屬中の一新種として命名されたものである、殼は微細で鋭く尖り茶褐色の半透明である、長さは八、五ミメ程あつて徑は三、二ミメ螺層八階半、老成したものに在ては胎殼から二三層は浸蝕して居る、殼口には半透明の薄い膜を有し外唇部に著しい隆起がある。

動物は半透明に近く、足の幅二ミメ長さ三ミメある、吻長く齒舌の運動を透視すべく、此の運動は人類の舌を以て物を嘗めると同樣である、齒舌は長さ一ミメ幅〇、一

五の微細なもので、觸角長く其基部に大きな眼がある、匍匐せんとする時は足の前三分の一を伸張し、後部を收縮して直に殼を前方に移動する、其樣は實に緩慢である。

片山貝は稻田の周壁、境界の小溝渠小畦上に叢生する雜草の下部、濕潤たる土壤面に靜止し匍匐する事は稀である、時々水中に潛入して匍匐するが多くは陸上生活をして居る、五月下旬から產卵して片山病に感染し易い時季は挿苗の頃であるのを見ると、產卵期になると水中生活を好むものらしい。

自分は七月下旬原產地に採集を試み生貝を持歸へつたが、試驗管に少許の水を注いだものに飼養して時々其習性を驗して見たが、管壁を匍匐する事はあるけれども多くは足を收縮して管壁に附着して居る、時々水中に浸入して直ぐ管壁に附着する。其樣或は全く死殼の如く罅を閉ぢ殼緣に存する自己の粘液を以て蓋下に群を爲して垂下したり又外殼の濕潤を利用して管壁に附着する事もある、是れを水中に投入すると再び前記の行動を繰返す、是れによつて考へるに該貝の冬季はよく寒氣に耐へ

土壌壁に附着して越年し得るものと思はれる。

片山貝の貝殻は山梨縣及び靜岡縣產のものと原產地及び佐賀縣產のものと對比するに甲は殻厚く光澤があつて黃褐色を呈し、螺層膨らみ殻口緣の隆起が著しく、乙は殻薄く光澤尠く、螺塔狹長で縫合淺く外唇部の隆起は左程著しくはない、此相違は唯風土の關係から來るものに過ぎぬが臺灣產のものは殻短く別種で未だ人體に感染したことはないと云ふことである。（圖版第三十三版）

（大正五、八、一二、大每附錄）

樂しき浦の眺めよな

お札博士相變らずの元氣

さるほどに敦盛蕎麥でウント元氣をつけた一行は又もや車上の人となつて熊谷直實其處退けの勇氣凜々國道筋を眞直くに西へと走り行くこと暫くにして此處は長汀曲浦の島の浦曲と云ふやうな例の通り靑松白砂宜しく

あつて紺碧の海を隔てゝ向ふには

◇紫向ふ淡路島山　油繪の如く浮んで見ゆる、此ころ天氣はどうやら晴上り瑠璃色の大空麗はしく見られたが西の寒風は愈猛威を逞うして沖には怒濤相打ち相碎けて今日は鷗の姿も見られず國道筋には黃塵濛々として眼も口も開いては居られず眞正面より此土砂の洗禮を受けた一行は頭ら安豆粉を附けた阿部川餅と云ふ形哀れと云ふも愚かなりそれでも博士は例の通り端然として

◇車上に納まり　遷轉窮りなき浦景色に御機嫌斜ならず敦盛の胴塚を見物して舞子に出ると名物の貝類館を訪問した同館が蒐集した貝類は日本種二千三百五十種外國種三百種に上りその中には大いに珍奇の物もあり博士は貝類にも非常に知識を有して居るだけに大いに興味を誘はれたらしくそれからそれと見物してなか〳〵出懸ける樣子もない館主の好意で茶菓を喫すべく館內の休憩室に入ると床の一隅に美しい蒔繪に飾られた

◇貝合せの箱が　置かれてあつたが肝腎の記者が何箱とも判らぬ間に博士は眼敏くも之を見付けて「オヽ、イエス、ヒアー〳〵、是れは貝合せですね床の置物には優

美で宜いと大いに日本通なる所以を發揮して記者や館主をアッと驚倒させた斯くて貝見物と貝談に小一時間も費した上館主より記念の爲にとて種々な貝類のお土産を頂戴し又も軸を連ね明石に着いたのが丁度三時……

（大正六、一、三〇大朝）

註　スタール博士に贈りし貝

タガヤサンミナシ　キリガヒ　ジュセイラ
リンボウガヒ　ホネガヒ　ニックワウガヒ
タルタカラ　キンチャクガヒ　ベニガヒ

スタール博士山陽行脚

音にきく舞子の濱は、ダンシング、ガール（舞妓）でなくして、ダンシング、バイン（舞ひ松）と名づくべきが至當である。何となれば、松を控除したる舞子は、愚劣を殘すにすぎないからである。今この愚劣ぶりを紹介すると、舞子には多くの洋館がある。洋館だから自然の順序として、ペンキが塗つてある。そのペンキが他人

のまねをしては濟まないとでも思ふのか、赤、青、黄のいろ〳〵の俗色を、次第不同に展覽して居るのだから大抵のものは驚く。それから中には御叮嚀にも、避雷針をすらそなへて居るものがある。避雷針のある洋館は、硝石製の劍の山で圍つた日本の家の如く、最も唾棄すべき、人類の住家である。一方に於て、このやうに四洋臭いかと思ふと、その繪具箱見たやうな洋館のすぐ側には、竹の柱に茅のやれと云つたやうな、純日本式の家が、いぢけた繼子みたやうに、チョコナンと介在して居る。之に加ふるに、閑靜なるべき住宅は、亂舞の場たるべき料理やと軒をならべて居る。舊新、洋和、紛然また雜然として、すこしの統一もないのが、舞子である。此統一のない百般のお客さまが、個々別々の行動を恣まゝにして、我れ勝ちにと眼玉のなかに飛びこむのだからこれをうけ入れる頭腦の混亂は、一通りや二通りではない。たゞ偉大なる自然が、ナニを猪口才な人間め、と云ひ顔に頑張つて居て、大抵の矛盾、混亂、不調和をのみつくして吳れるから、それで我等は助かるのである。さうでなければ、我等一行は舞子の濱で氣違ひになつて終つて、トテモ安全に下關につく事はできなかつたであらう。

この不統一な舞子に於て、舞子介類館は、最も貴き統一の除外例である。家の位置が裏長屋式なるに、一驚を喫した私は、その藏する所の貝類の豐富なるを見て、二度びつくりを禁じねなかつた。神のつくり給へる海底の貝、數をつくし、種類を

つくして、殆んど備はらざるはなし。亞非利加に於て金錢のかはりに使はれた寶貝を始め、むかし和蘭人が、一箇に百圓も出した大絲掛け、長絲掛けに至るまで、秩序整然と、愉快さうに箱(ケース)のなかにならんで居る。中には熱帶のものとばかり思つて居た貝が、日本産とあるに、少からず驚かされもした。貝類は私の專門の一である。(私がたび〳〵專門々々を振りまはすのだから、アイ君はクス〳〵笑つて居る)面白いので、何でも一時間ばかりを、溫室の如き、この館内にした。

(大正六、四、三、大阪朝日)

貝類學と貝塚の貝

貝類の分布　貝類を蒐集するのは、單に珍らしい貝を集めるとか、數多くを集めるとかを目的とするのでは無く、分類的に而も系統的に研究を主眼として蒐集しなければならぬ、分類は研究の唯一の目的である。又貝の分布を知る事は蒐集上主要なる目的である。

寒帶、溫帶若くは熱帶には特有の貝類を産出する。歐羅巴の沿岸に産するものと太平洋沿岸に産するものとは、其種類を異にするは勿論太平洋中にありても南北兩帶のものは其種を異にする。日本沿岸に在りても、日本海方面に産するものと、太平洋沿岸に産するものとは、著しく異るものを産する。尤も同種のものを産する事は有るが、形態を異にする事が多い。

貝類學の趣味　茲に面白き事は山陰道竝に北陸道一部の沿岸に於て、九州西海岸に産するものと同種の貝を産する事である。此の如き不思議な分布を見るのは何故であらふかといふと、琉球方面より九州西海岸を北上し、對馬海峽を經て日本海に入りて東行する暖海流があるからである。

また太平洋の黑潮の通過する所、卽ち琉球と小笠原島とは同系統の貝を産し、寒

海流の通ずる北海道の沿岸には、夫々特長の貝を產するのである。右述べたる如くにして貝の分布を研究し蒐集したる貝を分類し、茲に始めて貝類學の趣味を解する事が出來る。

貝塚の貝と新種　例へば一の新種ならんと思はるゝ貝、若くは既に命名せられたるものに對しても該種が果して日本固有に產したるものなりやとの疑問に到達する事がある。斯かる場合これを證明する唯一の證據となるべきものは、貝塚若くは同時代と目さるべき地點より發見せられたる貝である。貝塚は千葉縣下竝に東京市附近に夥しく群集して存在して居るが、東北及び關西地方には甚だ稀である。近畿地方にては漸く伊勢の桑名、紀伊の鳴神、但馬豐岡附近、丹後の函石、播磨の姫路千代田町の貝塚等數箇所に過ぎない。

此他は備前備中以西九州に跨り十數箇所あるのみである。此の如く關西地方に貝塚の分布尠きは何故か將來研究さるゝ事であらうと思ふ。

貝塚は海岸より離れて居る　貝塚は海岸にあるのはなく、大抵現今の海岸より遠きは一里乃至三里以上を距て居る、殊に但馬豐岡附近の貝塚は其距離最も遠く、而も豐岡より海岸に至る一帶は地下十數尺の地點に埋沒せる海產貝殼が發堀されるので、從來上古の但馬圓山川の下流は湖沼なりしか將た入江なりしかとの疑問も容易に氷解されるやうになつた。

貝塚の貝は現生種と同じものであるが、貝塚で採集せられたる種類は甚だ少い。殊にアカニシ、ツメタガヒ等の螺類は海邊より稍遠き海底に匍匐する關係上古代人に漁獲されたるものが尠いものと思はれる。

善く發育して居る貝塚の貝　到る所多く見出さるゝのは蛤で概して現生種より大形である。次でハヒガヒ、アサリ、シホフキ、オキシヾミ、カキ、カヾミガヒ等が多い。何れも現生種より能く發育し、貝殼も重厚なるものが多い。左れば石器時代には前記各種の貝類は最も廣く分布し、且つ現代の如く濫獲せられる事が無かつた

爲に、貝殼も充分に發育したのであると云ふ事が分かる。

殊に備中の貝塚より發掘したハヒガヒの如き現時兒島灣にて養殖しつゝあるハヒガヒの最も老成したるものに比しても尙著しく大形で且つ頑丈である。又カキも貝塚のものは至つて長大で、現時の養殖蠣に比し甚だしき相違を示して居る。是等は漁獲の尠かりしは勿論であるが、又石器時代と現時と地形の相違潮流の異つた關係をも持つて居るのでは無からふかと考へられる。

ニホンシヾミの本種　最後に述べて置きたいのは過日紀伊鳴神の貝塚から採集したニホンシヾミの貝殼である。該種は以前米國の貝類大家ピルスブリー氏がニホンシヾミの變種として命名したる現時阿波產のものと同一であつた。果して然らば該貝塚發掘の蜆を却つて本種とすべきものではなからうかと私は考へるのである。

前述の如く貝塚の貝は地質學上の知識を與ふるのみならず、現代の貝類の比較研究にも、分布の考察上にも多大の新知識を我々に與へて呉れるのであるから、一片

の殼片たりとも充分吟味して研究し貝類學上に幾分たりとも貢獻したい事と思ふものである。

（大正六、一一、一五大阪毎日）

明石蠣と廣島蠣

冬が來た……蠣船に大阪情調を味はふ季節が來た……何と云つても冬の料理は蠣が格別美味である、蠣船と大阪……古き緣故を有するだけ、自然大阪人士の嗜好に適する樣になり、蠣卽ち廣島蠣と云ふ樣になつた、今迄名を知られて居ない廣島蠣の兄弟分明石蠣を御紹介致したいと思ふ。

明石蠣、實の本名イタボカキと云つて、石器時代からの兄弟分であつた、其時分の蠣は何れも能く肥て大きかつたが、段々盛んに食用に漁獲せらるゝ樣になつたの

で、現今の蠣はズット小形になつた、ソコデ人工養殖の必要が起つて來た。

明石蠣の生立から述べて見よう、先づ五月から九月に亘り產卵するが、廣島蠣と異り母體內で受精し、幼貝となつて排出せられ周圍の礫又は所在の物體に固着する、幼貝は圓形で固着部は扁平、上殼の方は生長輪線(渦脈)と放射條紋がある。

產卵後一箇月生のもので最も能く發育せるもので直徑六、五粍、最小二、三粍、二箇月後は追々長楕圓形となり、五箇月後には稍角張り、漸次耳狀の突起を生じ、表皮の滑かなるものも漸く、放射隆起は突出して、貝殼の增大と共に密集したる葺瓦狀を呈するに至り、且つ前後兩端が突出し最も完全に發育したるものは角張りたる巾着形を呈する、大抵五箇年目に老成し夫れ以上の老貝で潮流の烈しき所に棲むものは突起磨滅して圓き巾着狀となるのである。

大體此明石蠣は廣島蠣と異り、潮流の烈しく且つ清澄なる場所に單獨に固着するので廣島蠣に比して分布區域は狹い、貝柱太く肉は稍堅く滋養素なるグリコーゲンの含有量は廣島蠣よりも多い、調理法としては附燒、味噌掛け、味噌煮最も美味く、特に西洋食には廣島蠣の遠く及ぶ所では無いのである。

貝殼を粉末として水中に沈澱せしめたるを乾燥したるものは所謂胡粉である、胡粉の優良品は繪の具用で、人形、扇子、襖紙等に塗り又漆器の下塗、菓子の糖衣に使用する、昔は健胃劑として用ひたものである、糖衣と健胃劑……其配合が自然の調和を得て居るのが面白いでは無いか。

分析表（風乾物百分率）

	明石蠣	廣島蠣		明石蠣	廣島蠣
乾物	九一、三七	九〇、三七	粗蛋白	三八、七八	四三、一三
有機物	八四、九五	八〇、九八	無機物	六、四一	九、三八
窒素	六、二一	六、九〇	石炭	一、〇〇	一、四六
燐	〇、九二	一、〇九	土	一、二七	一、五二
エーテル可溶物	九、七八	五、三四	鹽素	一、四三	二、六六
グリコーゲン	三、七八	二、九四	食鹽	二、三六	四、三八
			砂土	〇、二五	〇、九三

分布地一覽表

千葉縣	上總木更津、安房那古	香川縣	讃岐高松、丸龜、多度津
愛知縣	三河渥美灣、伊良湖、尾張大野	愛媛縣	伊豫今治
五重縣	伊勢白子、志摩答志	福岡縣	有明灣
和歌山縣	紀伊田邊	長崎縣	肥前長崎
兵庫縣	播磨二見、林崎、淡路都志	福井縣	若狹和田
岡山縣	備中西大島	石川縣	能登七尾

イタボカキとは天保年間に命名せられたので、千八百六十九年獨の博物學者イー、エー、リシケ氏が長崎產の標本により新種として發表せられたものである、現今愛知縣と兵庫縣とは饒產地である特に我明石附近產のものは品質優良とし、去大正五年より保護養殖を爲しつゝあり、又來年度よりは二見(播磨加古郡の小港)に國立養貝試驗場が設立せられ、專ら明石蠣の養殖に關する實驗を爲すことゝなつた。

明石蠣と廣島蠣との比較

明石蠣	廣島蠣
箇體	雌雄同體
產卵	母體受精
棲息	潮流烈しき礫地
貝殼	厚く大
上殼	葺瓦狀の渦脈薄茶色
下殼	荒き放射隆起と漬あり
(左殼)	
形狀	角張りたる巾着形
肉體	稍堅く澁味
利用	西洋食に好適 グリコーゲンを摘出して製藥 貝殼は胡粉、糖衣

雌雄異體
海水中にて受精
干潮多き泥土地
薄く小
渦脈粗大反曲、三乃至五の放射紋
荒き隆角を有し深し
長さ三角形
柔かく肉小
和食に適す
同　上
ペンキ代用品

(大正一〇、一一、二七大阪每日)

今回縣から貝類の調査と普通學術調査委員を囑託された矢倉甫田氏を舞子介類館に訪れると其處は椽からは春霞の中に淡路島が夢の様に浮きあがつて居るのが一目の内にながめられ小砂の上を這ふ波の音も靜かに聞こへる廣い部屋には氏が十餘年專心に蒐集した内外二千數百種の貝が眞珠や瑠璃で飾り立て美くしく陳列してあつた中には南洋オホヤシ貝などの大きなものもあれば肉眼ではとても見ることの出來ない位の小さなものもある。

いづれも此の絶ねざる努力の跡を物語つてゐた氏が斯く多種多様な貝を集め研究されるに至つた動機を尋ねると、

私は幼い時から古い貨幣をいぢる事が好きでした貨幣の歴史を辿るとその原始は皆貝であつたことを知つて貝を研究して見やうと思つたのがその動機でした。

明石沿岸、まして舞子附近は潮流の關係上珍らしい貝はゐないが但馬の日本海岸には隨分珍らしいのも多くゐるそうで數日前城崎の知人から送つて來たのだといふ

小砂を擴大鏡で見るとその中には名も知れない小さな貝が無數に交つてゐた、これ等は日本ではその名が解らないので外國へ送附するのだといつて試驗管の中に入れられてゐるのもあつた。

一つでも變つたのを發見しやうとするのですから隨分氣長にやつて居ますが私が館を開いて最早十五年にもなりますが世間ではその割合に認めて吳れません來觀者といつても極く少數の人々で只春の花見序とか海水浴に來て汽車を待つ間に一寸見に來るといふ樣な人が多くまだ貝に對する趣味が一般に持たれてゐないのだと思ひます。

氏は今度縣の普通學術調査委員を囑託されたので各地小學校を巡り貝に關する講話をするといふ。

（大正一〇、四、二一明石日々）

趣味研究 介類叢話 終

開館十五年史

明治四十一年七月十二日
標本室を公開して舞子介類館と稱す。

同　年八月十九日
須磨御別邸（現今なし）御駐泊中の　賀陽宮故邦憲王殿下には妃殿下、王姫宮殿下御同伴にて御來館台覽を賜ふ。

同　年九月十五日
大阪三越呉服店（舊館）に於て、名和氏鱗粉轉寫應用竝に平瀬氏貝類應用圖案友禪類展覽會開催せられ貝類標本數點出品す。

同　四十二年四月十日
東宮殿下（今上陛下）舞子有栖川宮御別邸御駐泊中　標本數點出陳し台覽を賜ひ貝類繪葉書、貝籠盛御買上となる。

同　四十三年六月二十三日
貝類採集見學の爲め淡路福良町へ出張イソコハクガヒを發見す。

同　年十月二十二日

平瀨介館主催貝類展覽會へ貝類標本竝に貝利用、應用品十數點を出陳す。

同　四十四年四月十九日

神奈川縣三浦三崎臨海實驗場へ見學の爲め出張しキヌヂサメサンセウ、クレメンチア、キキヤウニシ、ベツカフカキを採集す。

同　年十月八日

兵庫縣第二回水產共進會を高砂町に於て開催に付き、眞珠標本外十數點出品す。

同　年十一月八日

陸軍特別大演習に際し、明治天皇姫路行在所に御駐蹕中伊太利式貝彫刻品數點供進し天覽を賜ふ、

同　四十四年末藏貝數千九百七十六種にして其內譯左の如し。

	陸產	淡水產	海產	小計
日本產	四六六	六五	一、一一九	一、六五〇
酒精漬	〇	〇	一八	一八
擬軟體動物	〇	〇	一二	一二
化石	一一	一二	七二	九五
外國產	一〇一	四	九六	二〇一

大正二年三月二十四日

平瀨貝類博物館開館に付き貝類標本參考品十數點出品す。

同　年八月三十日

日本貝類寫眞帖を發行。東宮殿下竝に淳宮高松宮兩殿下へ獻上台覽を賜ふ。

同　年十月十一日

但馬城崎郡新田村中ノ谷貝塚見學及び竹野濱採集しミヂンギリギリツツを發見す。

同　三年三月十二日

神戸市にて開催の第二回貿易製產品共進會へ貝類標本及伊太利式貝、珊瑚彫刻製品數十點を出品し褒狀を受領す。

平瀨貝類博物館內開催の文蛤展覽會へ蛤に關する製作品數點を出品す。

同　年五月末現在所藏貝數二千二百九十種にして其內譯左の如し

	陸產	淡水產	海產	小計
日本產	五一七	八四	一、四二二	一、九二三
酒精漬	一	〇	二〇	二一
擬軟體動物	〇	〇	一二	一二
化石	一一	一五	七六	一〇二
外國產	一一三	五	一一四	二三二

同　年六月十七日より一週間大阪三越吳服店（舊館）に於て開催の貝類展覽會へ貝類標本七種、伊太利式貝彫刻
　　竝に珊瑚彫刻製品百數十點を出品す。

同　年十月三日
　明石郡公會堂に於て開催の第十七回關西九州（二府二十六縣）聯合水產集談會へ參考として貝類標本十數種
　伊太利式貝彫刻品十數點を出品す。

同　年十月三十日
　東久邇宮稔彥王殿下舞子へ御微行に際し帆立貝舞子風景掛額一個、伊太利式貝彫刻文鎭一個御買上となる、貝類繪葉及日本貝類寫眞帖一部獻上す。

同　年十二月十八日
　觀覽料任意徵收之件　兵庫縣知事の承認を得たり。

同　四年三月十日
　兵庫縣產貝類採集に就き　縣知事服部一三殿宛願書提出す。

同　年八月十五日
　兵庫縣產貝類目錄（假製）五十部印刷の上官衙學校知己友人に配布す。

同　年十月一日
　平瀨貝類博物館に於て御大典記念眞珠展覽會開催に就き眞珠標本及ブレパラート數點を出品す。

同　五年七月三日
　垂水池長別邸に御靜養中の　伏見宮博義王殿下御微行にて御成遊ばされ台覽を賜ふ。
　貝類標本一箱、小貝標本二種、貝類繪葉書を獻上し御嘉納を得たり。

同　年九月二十五日
　兵庫縣の援助を得て兵庫縣產貝類目錄を刊行出版す。

同　年十月二十日
　第二回兵庫縣水產共進會を明石郡公開堂に於て開催に就き貝類標本及伊太利式貝彫刻品を十數點を出品す。

同　年十一月十七日
　今上陛下武庫離宮御駐輦に際し貝類標本、伊太利式貝彫刻品、兵庫縣產貝類目錄五冊貝類繪葉書二十組天覽品として供進す。

同　六年一月三十一日
　大阪朝日新聞社後援の米國シカゴ大學教授フレデリツキ、スタール博士山陽行脚の途次來觀せらる。
　貝類標本九種一箱、コンコロジー三組、貝ピン一本、贈呈せり。

同　七年二月三日
　舞子（山田村の內川西）西の山洪積層中に貝層を發見し貝類二十一種を採集せり。

同　年四月一日

大阪三越吳服店に於て第八回兒童博覽會を開催に就き貝類標本二十一種を出陳す。

同　年六月末現在の所藏貝數は二千三百二十一種にして其内譯左の如し

	陸産	淡水産	海産	小計
日本産	五二六	一〇二	一、二九六	一、九二四
酒精漬	四	〇	二〇	二四
擬軟體動物	〇	〇	一四	一四
化石	一一	一二	八〇	一〇三
外國産	一〇三	一六	一三七	二五六

同　年七月五日

開館十週年の紀念として全部陳列賛を爲し和名の類別に據るもの五百五十八種及各地の鮑、迷信の貝類、ヂストマ標本、南洋土人貝器、貝貨石貨等を陳列す。

同　八年五月五日

平瀨貝類博物館閉鎖す。

同　年十一月二日

陸軍特別大演習に際し　今上陛下武庫離宮御駐蹕中縣下産小貝一箱天覽品として供進す、本縣知事より

東宮殿下へ獻上の兵庫縣産貝類百五十種一箱調達の命を受け謹撰の上納附す其内譯左の如し

陸産二十二種　淡水産四種　海産百二十四種

同　九年十月二十日

第四回兵庫縣水産共進會を飾磨町に於て開催に就き、眞珠標本、小貝標本及伊太利式貝彫刻製作品等十數點を出品す。

同　年十一月七日

神戸市眞陽尋常高等小學校内理科研究會の招聘に應じ、貝類に關する講演を爲し兼て標本を供覽す。

同　十年六月二十二日

垂水池長別邸御滯泊中の　伏見博義王妃朝子殿下御成遊ばされ台覽を賜ふ。貝類標本一箱、小貝三種、貝類繪葉書五種を獻上し御嘉納を得且つ御鄭重なる御賞詞を忝ふせるは光榮とする所なり。

同　年八月二日

大阪三越吳服店に於て湖川に關する展覽會開催に就き淡水産貝類六十種、ヂストマ及中間宿主の貝二種を出品す。

同　年十月六日

兵庫縣立神戸高等女學校第二學年生徒百五十名貝類見學旅行として來觀す、教科書中の貝類標本特別陳列を爲し縱覽に供す。

同　年十月二十二日
兵庫縣教育大會を尼市に於て開催に就き貝類標本、眞珠標本、プレパラート十數種出陳供覽す。
同　十一年五月二十日
神戸博物學會第三回例會を當館内に開き特別標本の供覽を爲す。
同　年五月三十日
朝鮮總督府主催内地人女教員内地學事視察團、々長川上敎諭外二十名來觀せらる。
同　年六月九日
兵庫縣立神戸高等女學校第二學年生徒百九十名第二回貝類見學旅行として來觀す、田螺、蜆、化石及び彫刻品等の特別標本を陳列し縱覽す。
同　年七月十二日
開館後十五週年記念日
同　年十一月三日
開館十五週年記念繪葉書五枚一組のものを發行し各方面へ配附す。
同　年十一月十三日
舞子萬龜樓御滯泊中の　梨本宮守正王殿下御微行にて御成遊ばされ台覽を賜ふ、貝類繪葉書五組獻上す。
同　年十一月二十五日

東洋貨幣協會、大阪古泉會主催、大阪毎日新聞社後援の貨幣に關する圖書及び參考資料展覽會を同社樓上に於て開催に付き左記出陳す。
臺灣紅頭嶼、阿里港。印度内地。アメリカ、インデアン。南濠州。ボルネオ。ソロモン島ブカ。ニューアイルランド、ヌサ。ニューブリテン、コ、ポ。ビスマルク島ミヨコ。ヤップ島蝶貝々貨。以上貝貨各種。
臺灣新竹ラハウ社(ピニトワン)パイワン族(ジヤパツ)宜蘭頸飾(マユン)以上貝貨代用品。
同　年十一月末日現在所藏二千九百六種にして其内譯左の如し

	陸産	淡水産	海産	小計
日本産	五四〇	一一五	一七六四	二四一九
酒精漬	四	〇	二〇	二四
擬軟體動物	〇	〇	一四	一四
化石	一一	一三	九三	一一七
外國産	一一五	二五	一九二	三三二

LITERATURE.

I. Works on the Fauna of Japan.

1. Beiträge zu einer Malacozoologia Rossica, von Dr. Middendorff. St. Petersburg, 1847.
2. Reise in den Aussersten Norden und Osten Sibiriens. II, Zoologie, ollusken, bearbeitet von Middendorff. St. Petersburg, 1851.
3. Reisen und Forschungen im amur-land, in den Jahren 1854—1856, etc. von Schrenck. II, Mollusken den Amur-landes des Nordjapanischen Meeres. St. Pitersburg, 1867.
4. Mollusca japonica, a Dunker, Stuttgart, 1861.
5. Japanische Meeres-Conchylien, von Lischke, I, II, III, Cassel, 1869—1874.
6. Fauna Molluscorum extramarinorum Japoniae, etc., von Kobelt, Frankfurt a. M., 1880.
7. Index Molluscorum maris japonici, a Duuker, 1882.
8. Catalogue of Marine Mollusks of Japan, H. Pilsbry, 1895.

II. Monographic and Iconographic Works.

9. Manual of Conchology, by Tryon, Jr., Philadelphia, 1878. Ist Series, Marine Univalves, vols. 1—10 by Tryon, 10—17 by Pilsbry, Second Series, Terrestrial Mollusks, vols. 1—4 by Tryon, 5 by Pilsbry.
10. Systematische Conchylien-Cabinet von Martini, und Chemnitz, Zweite Ausgabe. von Philippi, Pfeiffer, Dunker, Roemer, Clessin, von Martens, Kobelt, Brot, Weinkauff, etc.
11. Abbildungen und Beschreibungen neur oder wenig gekannter Conchylien, von Philippi, I, II, III, 1845—1851.
12. Conchologia iconica, or Illustration of the shells of Molluscous Animals, By Reeve, vols. 1—20, later volumes by Sowerby, 1843—1878.

13. Thesaurus Conchyliorum, by Sowerby, London, 1847—1887.
14. Novitates Conchologicae, Cassel.
15. Land and Fresh-water Mollusca of India, 1907, by goudwin-Austen.
16. Palaeonts graphica, Neue Tolge, Suppl. III, clausilieustudien, von Boettger, 1878.

III. Journals an Proceedings of Societies.

17. American Journal of Conchology, Philadelphia, 1865—1872.
18. Annals and Magazine of Natural History, London.
19. Bulletin de la Société Zoologique de France, Paris.
20. Japanska Cephalopoder, af Appellöff; Kongliga Svenska Vetenskaps—Akademiens Handlingar (New series) XXI, No. 13. Stockholm, 1886.
21. Journal de Conchyliologie, Paris.
22. Nautilus, Philadelphia and Boston.
23. Proceedings of the Zoological Society of London, 1830.
24. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia.
25. Proceedings of the United States of America; Bulletin; Miscellaneous Collection, etc., published by the Smithsonian Institution.
26. Proceedings of the Malacological Society of London.
27. Journal of Conchology, Leeds.
28. Journal of Malacology.
29. Nachrichlsblatt d. deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, Frankfurt a. Main.
30. Jahrbücher d, deutschen Malakozoologischen Gesellschaft.
31. Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Benagal, Calcutta.
32. Memoirs of the Asiatic Society of Bengal.
33. Records of the Indian museum.
34. Occasinoal Papers of the Museum of Zoology, University of Michigan, No. 64.
35. Zool. Anzeiger, XXIII.
36. Zeitschrift f. Malak, 1849.

37. Le Naturaliste.

IV. Voyages and Miscellaneous.

38. Voyage de Decouvertes de l' astrolabe, 1826—1829. Zoologie par Quoy et Gaimard, Paris, 1832.
39. Challenger Expedition, Reports, Cephalopoda, Gastropoda and Lamellibranchia by Hoyle, Watson, and Smith.
40. United States Exploring Expedition, etc. vol. XII. Mollusca and Shells by Gould, Boston, 1852.
41. Otia Conchologica ; Description of shells & Mollusks, from 1839—1862, by Gould Boston, 1862.
42. Zoology of the Voyage of Sammarang, etc., Mollusca by Adams & Reeve, London, 1848.
43. Zoology of Beechey Voyage, Mollusca by Gray, 1839.

44. Zoology of Siboga Expedition by Schepmann.
45. A Hand-List of Japanese Bivalves, by T. Iwakawa, reprinted from the Zoological Magazine of the Tokyo Zoological Society, 1914—1916.
46. 東京動物學雜誌 明治二十二年ヨリ續刊
47. 德永重康著 日本產介類圖說 帆立貝科 明治三十五年
48. 故內山柳太郎編 日本產貝類圖說 第一卷 明治三十六年
49. 介類雜誌 明治四十年—四十二年
50. 平瀨與一郎編 貝類手引草 一卷 明治四十二年
51. 同 貝千種 四冊 大正三、四、十一年
52. 同 著 笋貝類圖說 一冊 大正六年
53. 村上秀次郎編 琵琶湖產貝類(琵琶湖水產調查報告) 第二卷 大正三年
54. 岩川友太郎編 日本產貝類標本目錄 一冊

東京帝室博物館天産課藏　大正八年

55. 金丸但馬編　三重縣產貝類目錄　一冊　大正十年

（三重縣發行名勝舊蹟天然記念物調査報告）

55. 矢倉和三郎著　日本貝類寫眞帖　一冊　大正二年

56. 同　編　兵庫縣產貝類目錄　一冊　大正五年

跋

我が國で博物館といへば誰しも直に東京、京都、奈良の三大帝室博物館を擧げるでありませうが、私はこの外に三つの民間博物館のあることを記憶しなければならないと思ひます。卽ち岐阜にある名和氏の昆虫研究所、福井縣新庄村にある市川先生の水晶館、京都にある平瀨氏の貝類博物館がそれであります。之等民間博物館は何れも個人の研究が生んだ所のものでありまして、標本を蒐集して研究家の利便に供するといふ博物館よりは人に與へる感化力は大きいものがあります。殊に又その研究は何れも世界の學界に對し功績著甚なものがありまして外に向つては我が國文化の光を發揚して居るものといはなければなりません。私共は我が國にかういふ博物館のある事を名譽とし、その事業に對しては常に同情を持ちたいものであります。

所が昆虫及び水晶の博物館は今も尙隆盛を極めて居るのでありますが、貝類の博物館は今は閉鎖されました。平瀨貝類博物館は大正二年京都岡崎町に建設されたのでありましたが、維持の困難と館主の病氣のため大正八年遂に閉鎖の止む無きに至りました。そして私の申す三大民間博物館はその一つを失つたのであります。誠に遺憾至極の事といはなければなりません。けれどもこゝに此の遺憾を醫し、その缺を償ふて尙依然として三つを數へしめるものがあります。それは矢倉氏の舞子介類館でありまして舞子介類館は平瀨貝類博物館の分身異體で今や實に日本唯一の貝類專門の博物館であります。

矢倉氏は夙に古錢に趣味を有して居られ造詣淺からざる方でありましたが、貨幣の起源を尋ぬればその一つは貝殼に達するものでありまして、氏は貝に對しても淺からざる興味を有して居られました。たま〳〵平瀨氏は京都市下長者町に於て平瀨介館と稱して盛んに研究し、發行の介類雜誌上に於て貝類博物館設立の趣旨を發表せられたのでありましたが、矢倉氏は大にその趣旨を贊同し、一はその資金の一部を提供し、一は貝類趣味の普及を計らうといふ精神で多數の標本を一時に平瀨氏より申受け、舞子の自己の住宅を陳列場として舞子介類館なるものを開設せられたのであります。時は丁度明治四十一年七月でありまして、公開した陳列場としては平瀨氏の岡崎町なる博物館よりは早かつたのであります。爾來矢倉氏は常に平瀨氏と氣脈を通じ、一意研鑽大に標本を增加せられ、新品を加へられたものも一二ではありません。その間或は美麗なる寫眞帖を作り、又每年繪葉書を發行し、其の他講演に標本の提供に斯道の爲め盡瘁せらるゝ事は誠に多大なものがあるのであります。もとより此の種の事業は經營至難でありまして、氏が今日まで十五年の久しき變らないといふことは誠に奇特なことで他人の察し得ない苦心のあることを想はなければなりません。

私は矢倉氏とは殆んど開館以來の知己でありまして、よく經營上の苦心をも聞い

て居ります、然るに今開館十五周年を記念するために、書籍を發行せらるゝといふことであります。實に貝類に關する書物は甚だ乏しく、今書肆に就いて尋ねて見るならば恐らく皆無でありませう。さうしてその店頭には今夕購入すれば、明朝は屑物屋に賣却しなければならんやうな書物が一ぱいになつて居るのに氣付くのであります。大正の文化は燦然たるものがあると申しますが、私は竊に前に述べた三氏の事業の様な要素を加味する必要があるではなからうかと考へて居ます。私はまだ矢倉氏の書籍の内容を知りませんが矢倉氏からその通信を受けてどれ位喜んだかわかりません。喜びの餘り平素思つて居た事を書連ねて、乞はるゝまゝにお送りした次第であります。

大正十一年八月

目八庵主人　金丸但馬

大正十一年十二月十一日印刷
大正十一年十二月十五日發行

著作兼發行者　兵庫縣明石郡垂水村山田二千六十九番地　矢倉和三郎

印刷者　神戸市葺合區上筒一丁目四番地　光村印刷株式會社常務取締役　松村宗太郎

印刷所　神戸市葺合區上筒一丁目四番地　光村印刷株式會社

發行所　舞子公園西海濱　舞子介類館

正價金四圓七拾錢

發賣所

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社
振替貯金口座東京第五番

東京市神田表神保町　神田支店　振替貯金東京二六一六番
大阪市東區博勞町四　大阪支店　同　穴阪七四番
京都市三條鉄屋町　京都支店　同　穴阪一七三番
名古屋市中區柴町六　名古屋支店　同　名古屋一〇二九番
横濱市辨天通二　横濱支店　同　東京一一六五二番
福岡市博多上西町　福岡支店　同　福岡五〇〇〇番
仙臺市國分町　仙臺支店　同　仙臺一五番

終